

JQK

ヨコテ

真夜中のアパート、階段を上ったすぐの部屋で、立花賢吾はカードマジックの練習に励んでいた。しかし気分が乗らず、集中力は続かなかった。溜め息ばかりが出てしまう。

フリーターをしながらマジシャンを目指している立花は、華麗なステージでスポットライトを浴びる自分を夢見ていた。企業の慰問会や忘年会、ボランティアで老人ホームを巡ったりすることはあったが仕事といえる程のものではなく、食い扶持はもっぱらスーパーでのバイトで得ていた。それでも、日々の地道な練習こそが夢を叶える近道だと信じていたから、質素な生活での単調な練習の繰り返しも厭わなかった。そんなとき、滝田を知った。セミプロのマジシャン仲間から紹介されたのだが、知り合った半年ほど前は同じくらいのレベルだったのに、滝田の上達は凄まじかった。この一か月の間に、滝田はトップクラスのテクニックを身につけていた。

一度、滝田のマンションに行き、目の前でテクニックを披露してもらったことがある。教えを請いに来た立花に、滝田は困惑しながらも応じてくれ、棚からトランプを取り出した。滝田の差し出すカードを受け取り、立花は滝田に言われるままスペードのキングを一番下に持っていった。カードの底にスペードのキングがあるのを確認しながらテーブルの上を滑らせて滝田の前にカードの束を置く。少しずれたカードを人差し指で直し、滝田は一番上のカードを開くよう立花に言った。おもむろに立花が開くと、スペードのキングがそこにあった。人差し指を触れただけでカードを入れ替えたのである。それは信じられないテクニックだった。それだけでも驚異的な技だったのに、同じことを滝田は、今度は手を翳しただけでやってのけた。じっと目を凝らしても、どのタイミングでカードがすり替わったのか、皆目分からなかった。どういうタネが仕込まれていたのか、見当もつかなかった。立花は恥を忍んで、タネを教えて欲しいと頼んだ。残念ながら、と前置きをし、滝田は悲しそうに首を振った。

「そんなものはない」

本当にタネがないのか、それとも惜しくて教えたくないのか、立花には判断がつかなかったが、おそらくその両方だろうと思った。確かめてみてもタネらしきものは何もなく、物理的に不可能なはずだ。可能ならしめたのは何らかの手法による目の錯覚と、それを見破られないためのテクニックに違いない。目の錯覚を引き起こした手法は教えてくれないだろう。ならばせめてそのテクニックを身につけた練習法をどうしても知りたい。普通に練習しただけで、短期間にこれほど巧くなれるはずがない。そこには何か特別な秘密があるはずだ。そう思って懇願したが、滝田は頑なに教えてはくれなかった。あまつさえ、特別な練習などしていないとまで言い切った。そんなはずがない。目が覚めたら巧くなっていたとでもいうのだろうか。小馬鹿にしたような余りの素っ気なさに、恨みがましく腹が立ったが、滝田の拒絶は理解できた。それはそうだろう、頼まれたからといっておいそれと教えていたのでは、ライバルを増やすだけである。

その日から立花の頭から“地道”の二文字は消えていた。上達に近道があるのならそれに越したことはない。何とかして滝田の秘密を暴きたい。あれだけのテクニックを身につけた滝田のことだ、近い将来、必ずや華麗なステージに立ち、活躍するに違いない。立花は滝田が妬ましくてならなかった。きらびやかな衣装を身にまとい、尊敬の眼差しで見つめられ、驚嘆の声を浴びせられる滝田の姿が容易に思い浮かぶ。だが、滝田に近い将来は訪れなかった。

気が乗らないままに練習をしていた立花の、携帯の呼び出し音が鳴った。携帯を取ると、電話は滝田からだった。滝田のことを考えていただけに、その奇遇さに立花は少し驚いた。滝田の方から電話をよこすことは滅多になく、時間が時間だけに妙な気がする。

「どうかしたんですか？　こんな夜中に」

「寝てたのか？」

「マジックの練習ですよ。滝田さんほど巧くありませんので」

上達の方法を教えようとする滝田に嫌みを言う。

「ふっ。練習熱心だな。それが一番だ」

軽く受け流したあと、滝田は嘆息を漏らした。

「なあ、立花」

滝田の声は沈んでいた。

「何ですか？」

「俺は殺されるかもしれない……」

「はあ？」

立花は素っ頓狂な声を上げた。

冗談かと思ったが、滝田の声にそんな様子は窺えなかった。

「本当なんだ、まじめな話」

「穏やかじゃないですね。何かあったんですか？」

誰かの恨みを買うような人には見えなかった。物腰が柔らかく、優しそうな顔をしている。だが、プライバシーの話はしたことはなく、借金問題など、何かトラブルを抱えていたのかもしれない。滝田も立花と同じで、バイトで生計を立てていた。新宿でバーテンダーをしている。部屋の様子や身なりからして、裕福ではなかっただろう。

「お金がらみですか？」と、立花は訊いた。

「いや違う。そんなんじゃない」

「お前……俺が上達した訳を知りたがってたよな」

「ええ。驚異的ですからね。短期間であんなに上達できるのなら誰だって知りたがりますよ」

「悪いことは言わない。知らない方が身のためだ」

特別なことは何もないと言っていたくせに、やはりあったようだ。白々しい嘘を吐いた末に、今度は知らない方が身のためだと言っている。わざわざ電話をかけてきて、知ろうとするなど脅している。

「どういうことなんですか？ さっぱり分かりませんよ」

「それでいいんだ」

秘密の存在を匂わせただけで、核心には触れたくないらしい。美味しいものを手に握っていると思わされてお預けを食らっている犬のようだ、と立花は思った。

「何なんですか、いったい。殺されるかもしれないだとか、知らない方が身のためだとか……俺をからかってるんですか？」と、語気を荒げる。

そんな人だとは思いたくなかったが、滝田の見方を変えざるを得ないかもしれない。その秘密のために滝田は人が違ってしまったのだろう。そういえば、あんなに喜んでいてテレビ出演の話がこのところしなくなった。確かもうすぐ収録だったはずだが――。

黙り込んだ滝田に、立花は話を振った。

「そんなんで大丈夫ですか？ テレビに出るんでしょ？」

「テレビ？」と、滝田が他人事のように言う。

「出演が決まったって言ってたじゃないですか。あれは嘘だったんですか？」

「ああ、あれか。あれは断った」

「断ったですって？」

立花は信じられない思いがした。深夜枠とはいえ、名前を売り出す絶好の機会ではないか。それを自ら放棄するとは――。

「出る資格がないんだ」と、滝田は言った。

「そんなことはありませんよ。あんなにすごい技があるじゃないですか」

謙遜にも程があると立花は思った。

「あんなの……マジックじゃない」

突然、ゴトンと音がした。電話を落としたようだ。

そして奇妙な音が聞こえた。それは、叫び声をあげたいのに無理に口を塞がれたような、呻き声に似た音だった。電話が切れた。衝撃で壊れたのだろうか。それとも――

殺されるかもしれない――滝田の言葉が脳裏をよぎる。

急いで電話をかけ直す。が、何度呼び出し音が鳴っても滝田が出ることはなかった。

電話は壊れていなかった。滝田以外の誰かが電話を切ったのだろうか。

目覚めが悪かった。昨夜の不快な音が耳に残っており、立花はもう一度、滝田に電話を試してみた。またしても滝田は出ない。やはり何かあったのだろうか。

スーパーのバイトは午後からで時間には余裕がある。バイトに行く前に滝田のマンションに寄ってみることにした。何らかの事情があるのだろうと願い、いつものデイパックを肩にかける。

三階の角部屋をノックしても返事はなかった。すでに出かけたのだろうか。それともまだ仕事場から戻ってないのだろうか。昨夜の電話は店からではなかったようだが――。

「滝田さん」と、立花は呼びかけてみた。返事はない。ドアノブに手をかけて捻ってみたが、鍵がかかっている開かない。出かけたのであれ、戻ってないのであれ、中にはいないのだろうと思ひ、立花は帰ろうとした。しかしどうしても気がかりで、管理人に事情を話した。初めは立花の話に胡散臭そうに聞き、開錠に同意しかねる様子だった管理人だったが、殺されるかもしれないと滝田が言っていたと立花が告げると、管理人は顔色を変えた。

「厄介なことにならないければいいが……」

憂慮する管理人に続いて、立花は部屋に入った。カーテンが引かれていて薄暗い。

「滝田さん、立花です」と呼びかける。

返事はなかったが、テーブルの向こうに人影が見えた。窓際のソファで眠っているようだ。

「何だ、いるんじゃないですか。起きてくださいよ、滝田さん」

「人騒がせだな。こんなことじゃないかと思ってたんだ」

露骨に嫌な顔をして管理人が部屋を出て行こうとする。

「ちょっと待ってください」と、立花は呼び止めた。

滝田の様子がおかしかった。熟睡しているのだろうと思っていたが、その胸には微かな動きもなかった。顔色は異常に白く、文字通り血の気がないかのようだ。

立花は滝田の頬に触れてみた。冷たい。口に手を翳してみると、息がなかった。

「死んでる……」

立花の声に管理人も玄関から戻ってきて、滝田を凝視した。

「警察……警察に電話しないと」

管理人は慌てて部屋を飛び出していった。

立花はカーテンを開けた。朝の光が入り、部屋の中が明るくなる。滝田の死体がソファーにくっきりと浮かび上がる。滝田はブルーのパジャマを着ていた。

冷静に光の中の死体を見る。すると、ソファーの横の床に微かな血痕があった。死に至るほどの量ではなく、誰かと争った際に怪我をしたのかもしれない。何処を怪我したのだろうと滝田の死体に目を戻すと、パジャマの左手の袖口にも血がついていた。手首に何本かの線がある。リストカット？ 自殺したのだろうか。確かに気の弱い一面があったのは否定できない。テレビ出演のプレッシャーに押し潰されたのだろうか。しかし、それはうっすらとした傷跡で、昨日今日ついたものではなさそうだった。それに、滝田が口にしたのは“死にたい”ではなくて“殺される”だった。以前リストカットしたことがあるのかもしれないが、死の直接の原因ではないだろう。かといって真新しい傷跡はない。ならば袖口の血はどうやってついたのだろう。誰かに殺されたと考えるのが順当だろうが、よく分からない。窒息死だろうか。

自殺であれ他殺であれ、そんなものは警察の仕事だ、と立花は思った。自分の出る幕ではない。立花は頭を切り換えた。立花の頭に去来したのは、滝田が見せたマジックの秘密だった。こんな状況で秘密を探ろうとする自分に嫌悪感を持ったが、知りたいという欲求には抗えなかった。

前に一度来たときは気にも留めなかったが、秘密があるとしたらそこだろうと思い、立花は視線を本棚に移して近寄った。ジャズのCDが三十枚ほどあり、その大半がビル・エバンスだった。お気に入りのピアニストだったのだろう。そしてカクテルの本が数冊とマジック関係の本が数多く並んでいた。滝田は研究熱心だったようだ。それに引き替え自分は――。立花は恥じた。あまりにも安易に滝田の秘密を聞き出そうとした自分が浅ましく思える。が、そんなものはあっさりと霧散した。もうすぐ警察がやってくる。知るチャンスは今しかない。

気を取り直し、上達の方法を記した秘伝の書、そんなものがあるかもしれないと思い、一つ一つの本の背表紙に目をやる。見たこともない古めかしい本があり、立花は手に取ってデイパックにしまった。ここで読んでいる暇はない。借りていたと言ってあとでご遺族に返せばいいだろう。だが、しまったあとで気がついた。それが秘伝の書でないのは確かだと思えた。あんなにもすごいテクニックを指南してくれる本があったなら間違いなくベストセラーになっているだろうし、それこそ滝田ほどの腕を持ったマジシャンが街中に溢れていることになる。躊躇したが、立花は本を戻さなかった。ひょっとしたらとの思いを捨てきれなかった。

本棚の横にはスチール製の棚がある。趣味で集めたような骨董品の数々、陶製の人形や器が棚いっぱい並んでいる。テレビのサイドボードにマジックで使う道具類が置いてあった。ランプも数箱ある。ありきたりの市販もので、以前この部屋で滝田が使っていたランプはそこにはなかった。何処にあるのだろう。ざっと見渡しても見当たらない。本棚の陰に黒のショルダ―バッグがあった。あの中かもしれない。立花は手をかけようとした。

「何をしてるんです？」

ドアが開き、管理人が戻ってきた。

「別に何も……」

「そうですか。それならいいんですが……」

胡乱な顔で見やり、管理人は立花の前を横切った。滝田の死体の元に立つ。

「何で殺されちゃったんでしょうかねえ。こんな目に遭うような人には見えなかったんですが。ああ、警察はすぐに来るそうです。一応、発見のあらましは話しておきましたから。現場をそのままにしておくように言われましたけど、何にも触ってませんよね？」

「ええ。ですが、この前来たときに触ったと思います」

「何処に？」

「本とか棚とか、他にもいろんなところに」

「そうですか。これ以上触らないよう気をつけてくださいよ」

そう言いつつ管理人は窓に触り、開けた。

「やっぱり密室じゃなかったんだな。ここから逃げたんでしょうね、犯人は」

迷惑そうにしていた割に探偵にでもなったつもりなのか、管理人はベランダに出て下を覗き込んだ。首をかしげ、隣のベランダに目をやる。

「ベランダ伝いに非常階段へ行けないことはないが……」と、独り言を言う。

下には駐輪場があり、確か波形のスレート葺きの屋根がついていた。三階から飛び降りたら間違いなく穴があくだろうし、少なくとも破損はするだろう。どうやらそんなものは見受けられないようだ。残る逃走経路はベランダ伝いに非常階段へ行くことだが、それも管理人は疑っていた。

「無理じゃないかな。よほど訓練を受けた人間じゃなきゃ非常階段へ飛び移るなんて不可能だ」

非常階段は滝田の部屋の反対側にある。向こうの端のベランダと非常階段との距離がどれくらいなのか、立花は知らなかったが、確かめたいとは思わなかった。立花の目は本棚の陰のショルダーバッグに注がれていた。管理人が窓から顔を覗かせ、不意を衝かれた立花はうろたえた。

「滝田さんの知り合いに身軽な人はいませんでしたか？ 映画のスタントマンのような……」

まだ探偵気取りでいるらしい。

立花は首を振った。共通の知り合いは 燻っているマジシャンばかりで、サーカスの人間も自衛隊員もいない。

「みんな手先は器用でしょうが、運動神経となるとどうでしょうか。それほど深い交流があった訳ではありませんので詳しくは分かりませんが……」

推理が手詰まりになったのだろう、管理人が眉間に皺を寄せる。

「何にせよ、犯人は滝田さんに強い恨みを持った者に違いないな」と、訳知り顔で言う。

ドアがロックされた。警察が来たようだ。管理人が立花の前を横切り、ドアを開けると、数人の警官や刑事がどかどかと入ってきた。鑑識もいる。外で待つように言われ、先に管理人が部屋の外に出た。立花もドアに向かった。そのとき、キッチンのガスコンロのすぐ脇に携帯と例のトランプを見つけた。それは、柄は一緒だったが、以前見たときとは違って鮮やかな赤だった。立花は手に取って観察した。記憶を辿る。やはり柄は同じだ。中世のヨーロッパを思わせる凝った柄。だが、色の濃さが違う。もっと薄い赤だった気がする。記憶違いだろうか。それともここにあるのは別のトランプで、あのときのトランプは他のところにあるのだろうか。トランプの横には専用のケースと思われる木の箱があった。黒光りしていて、紋章のような同じ柄が施されている。そして大きめのガラスの皿が不自然に置かれていた。まるでこれからトランプを燃やして処分するかのようだった。

気がつくや、立花はトランプを箱にしまい、ジャケットのポケットに入れていた。見られなかったかと後ろを振り返る。幸いにも、警官たちはそれぞれの業務に忙しくしていた。

外に出ると、管理人は腕を組み、苛立たしそうにしていた。

「こんな機会は滅多にないのに……」

よほど実際の作業をその目で見えたかったようだ。人の生き死にを軽んじているようで、立花は不愉快になった。何の反応も示さない立花に、管理人もそれ以上は話しかけてこなかった。押し黙ったまま時間が過ぎていく。

やがてドアが開き、刑事がふたりの前に立った。メモの用意をしている。

「坂上といいます。あなたが第一発見者ですね？」と、立花に訊く。

はい、と立花が答えると、坂上刑事は立花の氏名、住所を控え、本題に入った。

「被害者との関係は？」

「知人です、マジック仲間の」

「マジック仲間？」

「これから売れていこうとするマジシャンの集まりです。セミプロといったところでしょうか。

滝田さんは頭抜けていましたが」

「被害者の滝田さんが中心的な立場だったということですか？」

「そうですね。一番巧かったですし、テレビに出る話もありましたから」

「犯人に心当たりは？ 誰かと仲違いしていたとか、妬んでいたとか」

「さあ。いないと思いますけど」

「女性関係はどうでしたか？」

「そういったことは話したことがありません。特定の彼女とかいなかったんじゃないでしょうか。部屋をご覧になって分かるとおりに、女っ気がまったくありませんからね」

坂上刑事が管理人に視線を向ける。自分の出番だとばかりに管理人は身構えた。

「マンション内でのトラブルとかはありませんでしたか？」

「いいえ、なかったと思いますね。滝田さんはおとなしい人でしたし、マンション内に問題を起こすような人もいませんから。ただ気になったことがあるんですが……」

「何です？」

「わたしも部屋に入るまで知らなかったんですが、滝田さんは骨董品を集めておられるようでした。棚に並んでいましたよね。そのことが関係しているのかもしれないと思ったものですから」

立花はギクリとした。ジャケットのポケットの膨らみを見咎められはしないだろうか、と危惧する。気づかれないように、そっと身体を斜めにする。

「骨董品を巡ってのトラブルということですか？」と、坂上刑事が管理人に訊いた。

「よくあるでしょ、安く買ったのに意外に高価なもので、返せ返さないとかいった話……」

「なるほど、確かに一理ありますね。あの棚だけ異質な空間のようでしたし、わたしにはまるで分かりませんが、中には高価なものがあるのかもしれないね」

管理人が悦に入ったように笑みを浮かべる。

「仕事で何かあったのかもしれませんが」

骨董品から話を逸らせようと、立花は口を挟んだ。

「被害者はどんな仕事を？」

「バーテンダーです。新宿の『ジョーカー』というバーで働いていました。マジックを見せる店です。僕も何度かマジックをしに行ったことがあります」

「そこで何かトラブルがあったかもしれないということですか？」

「酔っ払ったお客さんが絡んでくることがありますからね。タネを教えろとか、コケにして面白いとか、理不尽なお客さんはいますから」

「そういったこともあるでしょうね。他にも何か気づかれた点はありませんか？」

「あのう……」と、立花は腕時計に目をやった。

「そろそろバイトの時間なんですけど……」

時間が迫っているのは確かだったが、それよりも一刻も早くこの場から立ち去りたかった。デ
イパックには滝田の本が、ジャケットのポケットにはトランプが入っている。

「ああ、失礼しました。では、もう一つだけお訊きしたいんですが……」

「何でしょうか？」

刑事がメモ帳を構える。

「タバは何処にいらしましたか？」と、立花のタバのアリバイを訊いた。

疑われている。気をつけていたが、不審な点があったのだろうか。

心外だとばかりに、立花は顔をしかめた。

「バイトから帰ってずっと自分のアパートにいました。滝田さんと電話で話していたときもそう
です。証明する人は誰もいません。ですが、僕が犯人ならわざわざ発見を早めたりしませんよ」

「犯人だなんて思ってませんよ。ご協力ありがとうございました」と、刑事はメモ帳を閉じた。

本当に思っていないのだろうか。

慌ただしく指紋が採取され、立花が解放されたのは昼に近かった。バイトに遅れるのは確実に
、バイト先のスーパーに遅れる旨の電話を入れる。嫌みを言う小西主任に立花は必死に謝った。
事件のことを伝えると、大変だったな、と言ってくれたものの、あまり好かれてはいないようだ
と感じた。まじめ一本の小西主任にはマジシャンの卵などただの道楽者にしか見えないのだらう
。

バイトの連中が事件の話を知った。立花が沈痛な面持ちで知人が殺されたと話すと、皆
が驚き、申し訳なさそうな顔をした。それでも興味は失せないようなので、明日にでも話すと
言い、その場は免れた。話す前にニュースで知ってくれるだろう。

鬱々とした気分でバイトを終え、アパートに帰ってきた立花は、着ていたジャケットを脱ぐとベッドの上に放り投げた。ジャケットが不自然な弾み方をした。

そうだった。くすねてきたトランプがポケットに入ったままだった。

立花はジャケットから凝った作りの箱を抜き取った。トランプを取り出して左手に持ってみると、重さはほとんど感じられず、しっとり吸い付くようだ。何年も手に馴染んだような感覚がある。そっと右手で繰ってみる。――いい。繰っている気がしない。このトランプなら自由自在に操れるかもしれない。いてもたってもいられず、こなれたマジックを試してみた。繰りながら上のカードを順に一番下に移す。出来は信じられないくらいで、自分でも驚くほどに流れるようだった。次に一番上のカードを取ったと見せて二番目のカードを一番下に移す技をやってみた。観客は一番下に移動したはずのカードがまだ上にあるのに驚くという技だ。

これもあっけなくできた。道具が違ふとこんなにも簡単にできてしまうものなのか。惚れ惚れとトランプを眺める。これまでは何処かぎこちなく不自然さがつきまとい、人前での披露は憚れたが、これで何ら卑下することのないマジシャンになれたと思った。

これか。このカードのおかげで滝田は上達したのか。道具がよかったから上達できたんだ。何事においてもそんなことはある。グローブやクラブなど、プロのスポーツ選手は道具にこだわる。また、こだわるようであればその地位を維持できない。己の技量が重要なのはもちろんだが、上質の道具はそれを補ってあまりある。そこへ行くと立花は市販の安物を使っていた。道具の所為にはしたくないが、やはり良い道具というものは持ち手を変えてくれる――。

凝った作りをしたトランプのケースを凝視する。ヨーロッパの古い王家に伝わっていきそうな高貴で神秘的な意匠の造作は、美術工芸品としての骨董的価値がかなりのものであるのを窺わせた。

。

滝田の死体が眼前に浮かんだ。

管理人が言っていたように、滝田は返せ返さないで殺されたような気がしてくる。しかしどういわけか犯人はトランプを持って行かなかった。滝田の死に動揺し、慌てて逃げたのだろうか。だとしたら犯人は再びこのトランプを狙ってくるかもしれない。持っていると思われたら――それでも立花はトランプを返しに行こうという気にはならなかった。

誰も知るはずがないし、返すのは惜しい。それに他の品物かもしれない。

犯人の陰を払拭する。トランプに向き合う。

立花は滝田が見せた技、トランプに触れないで一番下のカードを上を持っていく技をどうやったらできるか考えた。物理的には不可能だ。考えられるのは、トランプをテーブルに置く前にすでに一番下のカードを上を持っていったということだが、そのタイミングは掴めなかった。目を皿のようにして見ていたのに、何処でカードを移したのかまったく分からなかった。

一番下のカードを素早く引き抜いて上にのせ、テーブルに置く。上質なトランプのおかげですんなりと簡単にできた。だが、滝田の見せた技は少しだけ違う。一番下のカードを確認させて、それからカードをテーブルに置いた。上のカードをめくると一番下にあったはずのスペードのキングがそこにあった。トランプをテーブルに置いたあとにカードを移したことになるが、もちろん指の入る隙間はない。一番下のカードに触れることさえできない。だとしたら滝田がやったのは目の錯覚だろう、と立花は思った。それ以外に考えられない。だが、目の錯覚を用いるにしてもその方法は見当もつかなかった。

立花は何度もトランプを繰った。

何かヒントが浮かぶかと思ったが何も浮かばない。

まあいい。インパクトのあるあの技を習得したかったのは山々だが、他の技でも十分にプロとしてやっていけるはずだ。焦らずともそのうちに滝田の技もできるようになるかもしれない――。

翌朝、新聞に滝田の事件が載っていた。

『新宿のバーテンダー 謎の死』

使われている滝田の写真はひと昔のもので、優しく微笑む顔は少しだけ太っていた。そういえばこの頃の滝田は会う度に痩せていった気がする。

記事によると犯行時間は夜中の十二時半。隣人が争うような物音を聞いており、ほぼ間違いないとされている。十二時半といえば電話が切れた直後だ。ゴトンと電話を落としたような音が思い出される。やはりあのとき滝田は犯人と争っていたのではないだろうか。滝田は電話を落とし、口を塞がれてそのままソファへ連れて行かれたのだろう。だとしたら犯人は複数の可能性が高い。電話を切った者が別にいるはずだ。

部屋を物色した様子がないところから、警察は金銭目的の犯行ではなく、怨恨の線が強いとみている。店の客とのトラブルや女性関係を洗い始めたらしいが、そんなところからは何も出てこないだろうと立花は思った。目の前にある骨董的価値の高そうなランプがトラブルの元凶に思えてならない。第一発見者であり、交友関係者のひとりである自分に、警察は再び尋問するはずだ。立花は迷った。犯人逮捕にはランプの存在を明らかにしなければならないが、そうするとあらぬ嫌疑を受けそうだ。盗んだ物ではなく譲り受けた物だと言い張っても証拠品として押収されるかもしれず、それは何としても避けたい。やっと運気が上がってきた矢先に手放したくない。このランプなしに成功はおぼつかないだろう。

立花は決めつけ、自らに言い聞かせた。このランプは滝田がくれた物で、事件に関係のある物ではない――。

それにしても、死因は何だったのだろうかと思う。新聞では今のところ特定されていないとなっていた。解剖がまだなのだろう。滝田の血の気の失せたような顔からして出血死に思えたが、血痕はあったものそれはごく少量で、とても死に至る量ではなかった。それに真新しい傷もなかった。となると窒息死だろうか。押し入っておいてわざわざ毒殺するとは考えにくい。口を押さえられたようなくぐもった声が思い起こされる。しかし、それも妙な気がする。窒息するほどの力を加えていたのなら、口や鼻の周りにそれなりの痕があるはずだが、そんなものはなかった。せいぜい声を立てさせないために押さえていた程度だろう。ビニール袋をかぶせていたとも考えられるが――

フツッと立花は自嘲した。これではまるで探偵気取りの管理人と同じではないか。その管理人の話が載っていた。

『わたしが発見したときにはすでに亡くなっていました。おとなしい方で、人に恨みを買うようには見えなかったんですが、骨董品集めが趣味のようでしたので、その関係でのトラブルがあったのかもしれない』

立花は新聞を閉じた。言いしれぬ不安が湧き起こる。あのランプはキッチンにあった。管理人が目にしていないとも限らない。もし目にしていたら誰が持ち去ったかは明らかで、譲り受けたと言い張るには不自然かもしれない――。

今日は幾分、早めにバイトに行く。不可抗力とはいえ昨日の遅刻の穴埋めで、少しでも小西主任の心証をよくしておきたかった。バイトの査定は社員である小西主任に一任されている。

事務室に到着した立花を、小西主任が苦虫の顔で迎えた。何かに不満を抱えているようないつもの顔だ。この人の嬉しそうな顔を見た覚えがない。まさか昨日の遅刻を根に持っているわけではないだろうが、小言を言われる前にといい、立花は急いで作業着に着替え、自分の持ち場である倉庫に向かった。

次々とトラックが横付けされ、品物を倉庫に運び入れる。所定の位置に積み上げる。立花は力仕事も苦にならなかった。体力には自信があった。マジシャンの望みが叶わないならこのままの日々が続くのかな、と思っていた矢先ただだけに、あのトランプと手に入れたことで立花のモチベーションは充実していた。バイト仲間も気が置けなかった。気心が知れていて、厳しい批評家であり、有力な理解者だった。そんなバイト仲間に、束の間の休憩時間にマジックを披露することがある。立花もバイト仲間もそれが愉しみて、各々は自販機の飲み物を片手に立花のマジックに見入っていた。時には申し合わせたかのように、休憩室に入りきれないほど多くの人が集まってしまい、小西主任に睨まれることもあった。休憩時間中だから止めさせることはしないが、終わりの時間が来ると皆を仕事に追い立てた。

今日も披露する。バイト仲間の藤田と中川に、顔を合わすなり催促された。同年代のふたりとは気が合い、立花も望むところだった。今日は滝田からくすねたトランプを持ってきていて、新たにできるようになったネタで驚かせられると思うと、つい顔が綻んだ。

休憩室には先に藤田と中川がいた。ふたりとも缶コーヒーを飲んでいて、期待感に顔を輝かせている。

「さあ、ショウの始まりだな」

無精ひげの藤田が嬉しそうに言う。顔は怖い根は優しいやつだ。

「そう急かせるなよ」

まんざらでもない顔で立花は応えた。わざと大仰にデイパックからトランプを取り出し、休憩室のテーブルに置く。

「おおっ、今までのとは違うな。何だか雰囲気がある」

藤田が言うと、中川も、うんうん、と頷いた。

入手の経緯を訊かれたくない立花は、早速マジックに取りかかった。

「同じカードはありませんね」

微笑みを浮かべながらカードを横に広げてみせる。バラバラに並んだ五十二枚のカード。当然、同じものは一つとしてない。

「どれでもいいから好きなカードを一枚抜いて」

藤田と顔を見合わせながら、中川がカードを手前に引き抜いた。ハートのクィーン。

「ハートのクィーンを選んでも彼女はできないぞ」と、藤田が茶々を入れる。

「うるさいな。ほっとけ」

立花は中川の手元にあるカードを見つめていた。

残ったカードを一つにして左手に持ち、束のカードの一番下にハートのクィーンを入れる。一度ひっくり返してハートのクィーンがまだ一番下にあるのを確認させる。

「一番下にあるハートのクィーンを一瞬のうちに一番上に持ってきます。よく見ててください」

カードが下から上に上るかのように、右手でカードを二度、三度とこすりあげる。その際、一番上のカードを一番下に持っていったのだが、そのことにふたりは気づいていない。カードの束をひっくり返し、一番下のカードをふたりに見せると小さな驚きの声が漏れた。

「ハートのクィーンがいなくなった」と、中川が言う。

「だから言っただろう。また逃げられたな」

中川をからかう藤田をよそに、立花はマジックを続けた。

「失敗したかな。ハートのクィーンはまだ上には来ていません」

一番上のカードをめくり、ハートのクィーンでないのを確認させる。

立花は再びカードの束をこすりあげ、一番下のカードを一番上に持っていった。元に戻ったことになる。何気なくもう一度こすりあげ、下から二番目のカードを上を持ってくる。

「まだのようですね」

一番上のカードをめくると、また別のカードがそこにはあった。

「あっ、別のカードになった」と、中川が目を丸くする。藤田も驚いた様子を見せたが、すぐにふざけた調子になった。

「クィーンは迷子になったのか？ 一瞬で一番上に行くと言っていたが、違ったな。本当に失敗したんじゃないのか？」

立花は満面の笑みを作った。

「実はまだここにあるんです」

一番下にあるハートのクィーンを見せ、カードの束を左の手のひらに乗せてすぐさまこすりあげる。一番上のカードをめくる。

「おお！」

「すげえ！」

ふたりが感嘆の声を上げる。

ふたりとも何処かの時点ですり替えが行われているのは分かっているはずだ。カードが自力で下から上に移動するはずがない。だが、こすりあげたことで、本当にそれが起こったかのような錯覚を与えることができた。立花自身でさえ、すり替えのカードに触れたかどうか分からないような完璧な出来映えだった。

「もう一回見せてくれよ」

ふたりのリクエストに応え、立花は同じことをもう一度やった。

今度も完璧だった。すべてが流れるように運ばれ、少しの疑念も抱かせないものだった。ふたりの観客の拍手と賞賛の言葉がやまない。それは友人としての配慮や激励などではなかった。ふたりとも心から目の前でなされたマジックに酔いしれていた。

このトランプさえあればプロとして充分やっていける――立花はそう確信した。

そのとき不意に、小さな座興の余韻を壊すものが現れた。

「お前たち、うるさいぞ！」

休憩室のドアを開けるなり、小西主任が怒鳴った。

立花は腕時計を見た。休憩の終わりにはまだ時間がある。

「僕たちはただ立花のマジックを見ていただけです」と、藤田が口を尖らせて言う。

反論は許さないとでも言いたげに、小西主任は立花たちを睨みつけた。

「ここは休憩室だ。騒ぐのなら他でやれ」

居たたまれなくなって中川は席を立ち、ドアに向かった。すぐに藤田が追いかける。トランプをしまい、立花も後に続いた。

「いばりやがって。たかが主任じゃないか」

「本当に嫌なやつだ。あいつさえいなければここはいい職場なのに」

中川が滅多に見せない不愉快な顔を見せる。

「転勤で何処かに飛ばされないかな」

藤田の言葉に立花は頷いた。

「いなくなればいいんだ、あんなやつ」と、腹立たしく言う。

早めの休憩を終え、立花は倉庫へ、中川と藤田は持ち場の総菜売り場へと戻った。倉庫での作業を始めてものの五分も経たないうちだった。小西主任がやってきて苦々しそうに言う。

「事務室へ来い」

休憩室でのマジックを禁止にするのだろうか。出世できないからといってバイトに当たるんじゃないやねえよ、と心中で罵りながら小西主任の後についていく。事務員の好奇の視線に晒されながら入ると、事務室内に仕切られた応接セットでふたりの男が待っていた。刑事だ。ひとりには滝田のマンションで尋問してきた坂上刑事だった。もうひとりの初顔は坂上刑事よりも若く、池谷と名乗った。

「お忙しいところすみません」と、頭を下げる。

立花も軽くお辞儀をすると、事務室のドアに手をかけた小西主任が振り返った。

「刑事さんの話が済んだらすぐに戻るんだぞ、いいな」

いかにも日頃からサボり癖があるかのような言い方だった。しかも刑事の前で。本当に腹の立つやつだと思う。

「もう少しお話を伺いたくて……。お手間は取らせませんから」

恐縮して坂上刑事が言う。

座るように促され、三人は同時にソファに腰を下ろした。

「話すことなんて、もう何もありませんよ」

同じ話をするのは面倒だった。それに小西主任への苛立ちで話をする気がしなかった。

坂上刑事は微かに笑みを浮かべていた。しかし、その目は笑っていなかった。

「すぐに済みますので……。まず立花さんのアリバイの件ですが……。証明してくれる人はその後見つかりましたか？」

「いいえ、誰も」

まだ疑っていやがる。第一発見者だから仕方がないのかもしれないが、それにしても不愉快だ。

「それは残念ですね。この前も訊いたんですが、滝田さんがトラブルを抱えていたようなことはありませんでしたか？　どんな小さなことでもいいんです。何か思い出されたことはありませんでしたか？」

「心当たりはないですね」

「そうですか。トラブルまでいかないにしても……。滝田さんを逆恨みしていた人物には心当たりがあるでしょう？」

何かを含むような、立花へ当てこするような言い草だった。坂上刑事が意地の悪い笑みを漏らす。知っているくせにとぼけないでください、とでも言いたげだ。

「さあ。逆恨みといわれましても……」

誰だろう。警察は何かを掴んでいるようだ。

「滝田さんのマジシャン仲間からいろいろと話を聞いたんですが、滝田さんはあるときから急激にマジックが巧くなったそうですね。そして立花さん、あなたは殺された滝田さんに何度も上達の秘密を教えてもらおうとしたそうじゃないですか。だけど教えてもらえなかった、違いますか？」

逆恨みの人物と目されているのを立花は悟った。

「一度だけですよ」と、嘘が口をついて出る。

まずい嘘だったようだ。それほど重要ではないと思われたくて吐いた嘘だったが、逆効果だった。坂上刑事が不審そうに目を細める。

「聞いた話と違いますね……。立花さん、あなたマジシャン仲間に愚痴ってますよね、何度訊いても滝田さんは教えてくれないって」

「そうだったかな……」

確かに愚痴をこぼしたことがある。薄情、水くさい、しみったれ、そんな言葉を使った覚えがある。些細なことだが、激しやすい人間ならそれだけで犯行に及ぶだろう。全くの無実であるのに、刑事に痛いところを突かれ、立花は頭の中が真っ白になった。

「でも、僕じゃありませんよ」と言うのが精一杯だった。

「あくまで可能性の一つとして考えているだけです。犯人に結びつく手がかりが何もなくて困ってましてね」

「もしも、もしもですよ、僕が犯人だとしたら動機はあるのかもしれませんが、どうやってあの部屋から出たんです？ あの部屋は僕と管理人さんが行ったときは閉まっていたんですよ。窓は開いていましたが、あそこから逃げられるとはとても思えません。犯人は合い鍵を持っていたんじゃないでしょうか。おそらく女性でしょうね。女性関係を調べるべきなんじゃないですか」

立花は必死に抗弁した。自分に向けられた嫌疑を他者へ向けさせなければと、それだけだった

。

「ご忠告をどうも。女性関係も調べてはいるんですが、まだそれらしい人物は……」

「隠れている謎の女性がいるはずですよ、きっと」

「まあ、捜査は始まったばかりでして、そんな女性がそのうち浮かび上がるかもしれませんが、先ほどの合い鍵の話、合い鍵なんて作ろうと思えば誰にでも作れますよね」

暗に、お前が合い鍵を持っているのだろう、と言っている。合い鍵を口にしたことで立花の立場はさらに危うくなってしまった。犯人と決めてかかっているようで、立花は苛つかされた。

「刑事さんはどうも僕を犯人にしたいようですが、そもそも殺人事件なんですか？ 僕も死体を見ました。見たところ大きな傷はありませんでした。手首にリストカットのような傷があっただけで……。自殺だったんじゃないですか？」

今度は立花が意地悪く訊いた。死体の様子からして自殺とは思っていない。だが何かを言わずにはいられなかった。

「自殺かもしれませんが、突発的な病死かもしれません。解剖の結果を待たなければなりませんが、隣の人が争うような物音を聞いていますから十中八九、殺人で間違いないでしょう」

「十二時半頃でしたよね、物音があったのは」

新聞記事を思い出し、立花は言った。疑う刑事の鼻を明かせると思った。

「そうですが……」

「それなら僕には完璧なアリバイがありますよ。そのとき滝田さんと携帯で話をしていたので、僕も変な物音を聞きました。口を塞がれて呻くような声です。そのすぐあと電話は切られました。通話記録を調べれば僕が滝田さんの家になかったのはすぐに分かりますよ」

「そうでしたか。通話記録に関しましては調査がなされていますから、間もなくハッキリしたことが分かるでしょう」

立花は溜飲の下がる思いがし、頷いた。

「それに、滝田さんの携帯には犯人の指紋がついているはずですよ」

「ほう。とおっしゃいますと？」と、坂上刑事が興味深げな顔をする。

「電話からゴトンと音がしました。おそらく滝田さんが犯人に襲われた際に床に落としたのでしょう。そのあと電話は切られました。十秒くらいだったでしょうか、慌てて切ったという感じでした。携帯があったのはキッチン、滝田さんの死体はソファにありましたから、滝田さんはキッチンで襲われてソファまで運ばれたんじゃないでしょうか」

「となると、犯人は複数でしょうか？ 大の大人を運びながら電話を切るというのは考えにくいですから、少なくともふたり以上はいたんでしょうね」

「そうですね。そう考えた方が自然だと思います」

「いやあ、ありがとうございます。立花さんのお陰で捜査は進展することが出来そうですよ」

攻撃的とも思えた坂上刑事の口調が、打って変わって馬鹿丁寧になる。立花は小さな安堵を覚えた。これで疑いは晴れたと思った。

またお話を聞きに伺うかもしれないと言い残し、刑事たちは事務室を辞した。

滝田の死は痛ましいことだが、いつまでもかかずにいる暇はない。立花はバイトが終わるとすぐにアパートに帰り、マジックの練習を開始した。もちろん手にはあのトランプを持っている。練習をしながらも、時として立花の集中力は切れた。帰り際の小西主任のわざと人を怒らせるような嫌みが思い出される。

「ちょっとマジックができるからといって、サボりを大目に見てもらえるとは思わないよ」

誰も好き好んで尋問を受けたわけじゃない。曲解するにも程がある。ことさらあげつらっているのではないか、と思えて仕方がない。

立花は小西主任が憎かった。心底、いなくなって欲しいと思った。

滝田のトランプが幸運を呼び寄せたのか、立花にホテルでの仕事が舞い込んできた。マジシャン仲間の都合がつかなくなり、急遽おはちが回ってきたものだった。ホテルでのマジックショーには五組の出演者がいたが、その中で立花が一番若く、かつ無名だった。あとの四組は程度の差こそあれ、テレビに出たこともあり、多少の引け目は感じたものの、自分には例のトランプがついていると思うと不思議な高揚感が湧き、誰にも負ける気がしなかった。

ホテルでの仕事は完璧だった。

藤田たちに見せた技に応用を加え、観客の指定する場所、上から何枚目とか下から何枚目とか、好きに言ってもらった場所に思いどおりにカードを移動させられるようになった立花は、指先の微かな感覚だけが頼りだったが、意識を集中していれば外す恐れはないとの絶対的な自信があった。他にも自然の動きの中で、シャツのポケットやテーブルに置かれた箱の下から、いつそこに持っていったのか分からないようにして出してみせることも出来るようになっていた。ステージの袖では先輩マジシャンが嫉妬と羨望の眼差しで見ている。出し抜いた感があり、心地よかった。観客のすべてが自分のマジックに酔いしれていると思った。

ステージを終えた立花に拍手の嵐が鳴り止まなかった。万感の思いが押し寄せ、嬉しくて立花は泣きそうになった。控え室にホテルの支配人が来てくれて、三ヶ月後に単独で呼んでくれることになった。しかもギャラは倍増で、ひと月くらいどうか、と打診があった。一も二もなく、立花は承諾した。滝田の幸運をもたらすトランプのお陰で、プロとしての第一歩が順調すぎるほどに始まったと思った。

高揚した気分のまま帰宅する。

感謝の気持ちでトランプをテーブルに置く。滝田からくすねた後ろめたさはあったが、そんなものはもたらされた幸福の比ではなかった。嘘のように手に馴染むトランプを持っている限りこれからの成功は間違いない。ただ、滝田が見せた手を翳すだけでカードを動かすマジックのトリックが、未だに見破れないのは癪だった。

立花は三ヶ月後が待ち遠しかった。次回のホテルでのショーが終わったあとには評判が評判を呼び、テレビの仕事が来るかもしれない。そうなったら皆がちやほやし、女の子が我先に押し寄せるかもしれない。今まではそんな日が来るのを夢想するだけだったが、やっと現実のものになりそうだ。栄光の日々はすぐそこにある。

もう一つの現実が立花の脳裏をよぎった。小西主任の存在だ。ひと月もバイトを休んだらおそらく辞めさせられるだろう。出来ればまだ続けたかったが、それならそれで構わなかった。いい潮時だ。いつかこういう日が来るのは分かっていたこと、小西主任の望みどおりに辞めてやる。向こうがいなくなろうがこっちがいなくなろうが同じことだ、いつも不機嫌そうにしているあの顔を見ないで済むと思うだけで清々する。

立花は疲れていた。大勢の観客の前での慣れないステージは、肉体的にも精神的にも立花を綿のように疲れさせた。だがそれは悪くない疲労だった。心地よい幸福感に包まれた疲労だった。

ベッドにもぐる。今日の大成功をバイト仲間に伝えるのが愉しみだった。きっと祝福してくれるだろう。そう遠くない将来、華やかなステージで活躍する自分を皆が見に来てくれるはずだ。その中にはレジ係の古賀志津香さんもいるだろうか、そんなことを考えながら立花は眠りについた。

ふと、何かの気配で目が覚め、立花は首を動かして辺りを見渡した。

真っ暗な中で何かが動いている。

何だろうと、よく確かめようとして起き上がろうとするが、身体が動かない。何かに押さえつけられたかのように身動きがとれない。かろうじて動くのは首だけで、これが話に聞く金縛りかと思った。身体を自由を奪われるというのは恐怖だった。あまつさえ、部屋の中には得体の知れない何かがある。目が闇に慣れてくると人影のように見えた。いや、確かに人だ。中世ヨーロッパの貴族のように見える。若い男もいれば髪の長い女もいる。そいつらがよってたかって立花を押さえつけている。宙に浮いている者もいて、その髭をたくわえた男が顔を近づけた。威厳のあるその男に立花は見覚えがあった。

スペードのキング……まさか。

カードに描かれた絵柄ではなく、生身の人間だったが、それは滝田からくすねたトランプの、スペードのキングそのものだった。スペードのキングは諸刃の剣を持っていた。剣が闇に冷たく光っている。

殺される！

立花は逃げようとした。だが、ジャックやクィーンに押さえつけられた身体はどうやっても動かない。助けを求めようと叫び声を出そうとするが、口を塞がれていて、うううと、か細い呻き声は出せても言葉にならない。

スペードのキングが立花の左腕を掴んだ。万力で締めつけられたかのように力強い。手首に刃が当てられる。剣が皮膚の上をスーッと滑ると、チクツとした痛みが走った。スペードのキングはいつの間にか杯を持っていた。溢れ出る血を黄金色の杯で受け止めている。

「安心しろ、殺しはせん。挨拶代わりに、ほんの少しもらうだけだ」

スペードのキングが不敵な笑みを浮かべる。

立花は己の血が流れ、杯に落ちていくのを呆然と見ているしかなかった。

こいつらは何をするつもりだ？

滝田の蠟人形のような蒼白の顔が思い浮かんだ。そして手首の傷――。

滝田はこいつらに殺されたに違いない。

恐怖におののき、立花は暴れた。逃げようと藻掻いた。しかし、数人がかりでがっちりと押さえられていてどうにもならない。

スペードのキングが再度、顔を近づけた。

「殺しはせんと言っただろ、臆病なやつだ。だがな、儂らを裏切ったら容赦せんからな」

容赦せん――

殺すということだろうか。多分そうだろう。滝田はこいつらを裏切ったから殺されたのだろう

。スペードのキングは杯を口に持って行って血を飲み、満足そうな声を上げると次の者に渡した。杯が次々に回される。

「今度の血も不味くはないぞ」

「上等だ。若い血だからな、力がみなぎっている」

「こうして新しい血にありつけた。喜ばしいことだ」

各々が嬉しそうに言い、まるで祝宴のようになる。さながら立花はメインディッシュにされた気分だった。あるいは生け贄かもしれない、と思った。何かの悪魔的な儀式のために血を提供させられた、哀れな子羊なのかも――。

スペードのキングが剣の腹で手首の傷をなぞると、流れていた血は止まった。

さももったいないと言いたげに、おぞましい笑みを浮かべ、剣に付着した血を舌先でちろちろと舐める。その剣先を心臓に向けた。

「お前は血を提供する。儂らはお前の意をくんで動く。マジックは思いのままだ。協力は惜しくない。どうだ、素晴らしい関係じゃないか。おとなしく血さえくれれば悪いようにはしない。ああ、それから煙草は吸うんじゃないぞ、血が不味くなる」

言い終わると、スペードのキングは闇に消えていった。他の絵札も次々に消えていく――。うつらうつらとして目が覚めた。

いつの間にか朝になっており、カーテンの隙間から朝の光が射している。ハッとして半身を起こし、立花は手首を調べた。夕べ、スペードのキングが剣でつけた傷の痕がうっすらと残っている。それは滝田の手首に残っていたものと同じだった。

傷があるということは――あれは夢ではなかったのだろうか。そんなはずはない。夢に決まっている。あんなことが現実にかかるはずがない。何とも恐ろしくて奇妙な夢を見たものだ。やけにリアルだったが、所詮は夢だったんだ。手首の傷は――知らないうちについたものだろう。それが合理的でないことは立花にも分かっていたが、無理からにそう思って自分を納得させた。

鏡を見ながら髭を剃る。少し痩せた気がする。

トーストを頬張り、新聞に目を通す。

滝田の事件の続報が載っていた。死因は出血性ショック死。

やはり滝田は血を抜かれ、出血多量で死んだらしい。しかし、あの部屋にはほんの少しの血しか落ちていなかった――。

夕べの光景がまざまざと蘇る。

剣で立花の手首を切るスペードのキング。黄金色の杯にためた血を旨そうにのみ絵札たち――

立花はベッドにとって返し、布団をめくった。少量の血がついている。記憶の光景が現実だったという確実な証拠がそこにあった。それでも立花は信じられなかった。信じたくなかった。滝田と同じ目に遭わされるかと思うと恐ろしくて仕方がない。そう思う一方で、信じてみたい気も湧いてきた。

恐ろしい相手だが、上手く付き合えば成功へと導いてくれるはずだ。

悪いようにはしない――スペードのキングの言葉が思い出される。

演芸ホールでの急な仕事が決まった。ホテルの支配人が推薦してくれたらしい。数多の有名人を輩出した老舗ホールでの仕事に、確実にステップアップしているのを立花は実感した。

これを機に衣装を新調した。それまでのカジュアルだった衣装からスーツに変えた。思った以上の出費は痛かったが、晴れの舞台、プロとしての心構えを確固たるものにしたかったし、見映えも気になった。

嬉しいことに、藤田がバイトの何人かを引き連れてくるらしい。小西主任の目もあり、休憩時間にマジックをやらなくなった分、愉しみにしているとのことだった。レジ係の志津香も来てくれるとのことだった。以前勤めていた会社の同僚と婚約していて、今更どうなるものではないと分かっている、淡い思慕はまだ燻っている。

あの夢を見て以来、立花は、休憩時間はおろか、家でもトランプを手にしていなかった。滝田からくすねたトランプは、箱から出されないで棚に置かれたままだった。触るのが怖かった。晴れの舞台を前にして、何日も練習していないのは不安だったが、それでも触る気にならなかった

老舗演芸ホールステージは古臭く、お世辞にも綺麗とはいえなかった。それでも立花は感慨深いものがあった。有能な諸先輩が巣立っていったステージに自分も立っていると思うと、込み上げてくるものがあった。全くの無名だった自分が、ろくにテクニックのなかった自分が、今やこうして堂々と老舗の舞台に立っているのが誇らしかった。

ステージの袖から中央の、赤い布をかけられたテーブルの前に進み出る。大きく息を吸い、箱からトランプを取り出す。久しぶりに触れるトランプは心なしか硬く感じられた。

まずは簡単にカードさばきの技を見せ、立花はひとりの若い女性をステージにあげた。バラバラになったカードから四枚のエースを抜き取ってもらい、残ったトランプの束の上に置く。一番上のカードをひっくり返し、エースがまだそこにあるのを確認させる。もう一度裏返しにして、そして一番上のカードを取ったように見せて一番下のカードを取り、おもむろにカードの束の適当なところに入れる。二枚目、三枚目、四枚目と繰り返す、これで四枚のエースはトランプの束の何処に行ったのか分からなくなった、と告げる。四枚のエースは上に残ったままだが、すっかり信じ込んだ若い女性は、その通りだと頷く。

「バラバラになった四枚のエースを再び上に集結させます」

立花はトランプの束を右手の人差し指で、ちょっと叩いた。

「まだそろってませんね」

また叩く。

「もう少しでしょうか」

もう一度叩いてトランプを女性に差し出す。

「さあ、めくってください」

女性がカードをめくる。小さな驚きの声を上げ、女性はカードを観客に見せた。ハートのエース。女性が次のカードをめくる。スペードのエース。ダイヤのエース。そして最後にクローバーのエースが現れた。観客からどよめき起きる。

「すごい。信じられない」

女性が目を丸くして言う。四枚のエースを手に持ち、不思議そうに確かめる。

「もう一回いいですか？」

「ええ、いいですよ、何度でも。女性にお願いされると断れませんから」

調子の良さに口が軽くなる。

「それじゃ、今度はクィーンで」

そう言うなり、女性は四枚のクィーンを抜き取った。

立花は嫌な予感がした。杯の血を旨そうに飲んでいたクィーンの姿が頭に描かれる。

立花の胸中など知るはずもなく、女性は嬉々として四枚のクィーンを立花に渡した。立花は受け取ってトランプの束の一番上に置いた。何度も成功して失敗するはずはなかった。だが、絵札のクィーンということで平静ではなかったのかもしれない。一番下のカードを取ったはずなのに、指先に感触がなかった。成り行きのままに、一番上に置かれているクィーンをカードの束の中に入れてしまった。

失敗だ。

無理に笑顔を作る。動揺しているのが自分でもハッキリ分かった。どうやって失敗を誤魔化すか、それだけを考えながら次のカードも同じように束の中へ入れた。失敗した以上、もうすり替えはしなかった。

ボランティアで行った老人ホームでもやったことのない失敗。老人ホームなら笑ってやり過ぎるだろうが、ここは老舗の演芸ホール。お金を払ってひと時の愉悦を得ようと見に来た観客に失望感を与えてしまう。悪くなった空気は他の出演者にまで影響を及ぼすことだろう。

どうすればいいのか――。

何の考えも思いつかないまま残りのクィーンを束の中に入れ、トランプを女性に差し出す。「あのう……叩かなくてもいいんですか？」

忘れていた。

立花は顔から火が出る思いがした。

「二回目は省エネです」と、苦しいジョークをいうのが精一杯だった。

省エネどころか、二回目は失敗だ。もうすぐ観客の冷笑に晒される――。

女性の手が一番上のカードにかかる。めくったカードは――スペードのキングだった。クィーンが現れるはずなのにキングが出てきて、観客の間から失望の声が漏れる。女性も失敗の原因が二回目を頼んだ自分にあるかのように、申し訳なそうな顔をしている。立花は覚悟を決めた。失敗を正直に告白し、次のマジックで挽回するしかない。トランプを返してもらおうと手を伸ばしかけた。しかし何を思ったのか、その前に女性が次のカードをめくった。ハートのキングが現れ、オヤッという空気がホールを包む。女性も何かを期待するような、ひょっとしてという顔をしている。

馬鹿な、偶然だ。

女性が三枚目のカードをめくった。クラブのキング。誰もが失敗したふりをして別のカードをそろえる演出だと思っている。あり得ない。そんな偶然が続くわけがない。

女性が四枚目のカードに手をかけた。その手がゆっくりと返る。

女性が悲鳴にも似た声を上げ、興奮の面持ちで手に持ったダイヤのキングを観客に見せる。どっと歓声上がる。拍手が鳴り止まない。女性が立花に拍手を送りながらステージを降りていった。拍手に応え、立花は観客に向かって深々とお辞儀をした。何がどうなっているのか、訳が分からなかった。残りのステージをどうやって終えたのか覚えていなかった。気がついたら楽屋にいた。出番前の他の出演者も賞賛の声をかけてくれた。立花は上の空だった。どうしてバラバラだったキングがそろったのか、考えられる答えは一つしかなかった。キングが自ら動いた――。

「いやあ、素晴らしいステージだったね」

楽屋に入って来るなり、ひとりの中年男が立花に向かって声をかけた。他の出演者がペコペコと頭を下げている。誰だろうと思っていると、近くにいた漫才師がそっと耳打ちしてくれた。テレビ局のプロデューサーらしい。

「どうも」と、立花はぎこちない挨拶をした。

「関東テレビの渡部です。今日は来てよかった。ときどき、有望な新人を発掘するためにこうしてきているんだが、金の卵を見つけたよ」

「恐れ入ります」

またしても幸運がやってきた。思わず顔がにやけそうになる。

「まだ若いのにたいしたテクニックだ。完成されているというか、華麗な指さばきは芸術と言ってもいいくらいだ。誰についていたんだ？」

「いえ、特には」

「ということは独学か？」

「ええ、そうです」

「独学であれだけのテクニックを身につけるとは……今後は愉しみだな。ますます気に入ったよ。どうだ、俺の番組に出ないか？ 全面的にバックアップしていくぞ」

将来を保証する言葉をかけられ、立花は舞い上がった。画に描いたようなサクセスストーリーだ。成功を渴望する立花にとってこれ以上の言葉はない。だが、微かな不安を抱いたのも事実だった。言葉が軽い気がする。

「本当にテレビに出られるんですか？」

戸惑う立花に、渡部プロデューサーが笑みを浮かべる。

「一応プロデューサーだからな、それくらいの権限はある。エンタメ界の有望な若手を紹介する番組だが、マジックのコーナーを君に任せたい。ここと違ってゲストの目の前でやってもらうが……大丈夫か？」

「大丈夫も何も……やり遂げてみせますよ」

悲壮の覚悟で立花は言った。やり遂げるしかない。何としても成功させ、輝ける未来を手中に収めたい。

うん、うんと、渡部が満足そうに頷く。

「明日にも打ち合わせの電話をするから」と言い置き、忙しそうに楽屋から出て行った。

ぽっとでの新人である立花の、テレビ出演の快挙を祝福する声と妬む顔。楽屋にいる出演者たちは各々の心のままに、それぞれの反応を示した。

近くにいた男は立花に好意的だった。

「渡部プロデューサーに目をかけてもらえるなんてたいしたもんだな」と、親しみを込めて言う。よく見るとバラエティー番組で見たことのある漫才師だった。が、名前までは思い出せなかった。

「プロデューサーにはああ言いましたが、テレビは初めてでして、勝手に分からなくて……」

「なあに、あれだけのテクニックがあるんだ、心配することはない。テレビカメラがうろちょろして手元を映すだろうが、まあ気にしないことだ」

手元を映されるのは少しも気にならないだろう。立花が気になっていたのは、自らの意思で動き回っているとしか思えない絵札たちだった。

悪いようにはしない――

あれは咄嗟にかばってくれたのだろうか。

「気をつけろよ。あの人は意外と短気だからな。ちょっとしたことで怒るし、それを根に持つんだ。上手くいっている間はいいが、一度でもしくじると途端に手のひら返し。上にはペコペコして下には威張り散らす嫌なやつだ」

楽屋の隅から声がした。そのキンキラの衣装を着た中年男に立花は見覚えがあった。数年前は頻繁にテレビに出ていたが、最近はさっぱり見かけなくなったスタンドアップコメディアンだ。渡部プロデューサーとの間に確執があるのだろうか、少しだけ恨みがましい。

しくじるはずがない。今日もしくじりそうだったが、絵札たちが助けてくれた。ふふっ――馬鹿げている。そんなはずがない。あれは偶然だ。偶然が重なって四枚のキングがそろったんだ。だが、その確率はどれほどだろう。きっと天文学的な数字に違いない。そんな奇跡的な数字を可能にするほど今日はずいていた。あのいわくありげな箱といい、滝田からくすねたトランプには幸運を呼び寄せる力があるのだろう。だから偶然テレビのプロデューサーも来ていた。しかもテレビ出演がその場で決まった。まさに幸運のトランプだ。あれさえ持っていれば幸運は続くはず――。

演芸場での成功に気をよくして帰宅の途についたが、思わず立花は眉をひそめた。

アパートの前に二つの影があった。刑事が待っていた。向こうも立花に気づき、お辞儀をする。

「そろそろ帰ってこられるだろうと思ひまして、お待ちしておりました」

坂上刑事が人懐っこい笑みを見せる。疑いは晴れたのだろうか。もうひとりとは先日の若い刑事、確か池谷とかいう刑事だった。

「僕の通話記録は調べたんでしょ？ だったらもう用はないはずですが」

「ええ、調べました。立花さんの携帯があこの時間、ここで使われたのはハッキリしました」

第三者が携帯を使ったのかもしれない、とでも言いたいような口ぶりだった。

「確かに僕はこのアパートにいましたよ。まだ何か？」と、語気を強める。

「滝田さんの携帯を切ったのは犯人だろうとのことでしたが……滝田さん以外の指紋が検出されなかったんですよ」

「されなかった？ 手袋か何かしていたんじゃないですか」

「おそらくそうでしょうね。用意周到なやつです」

そこまで計画的に殺人を行える人物が滝田の周りにいたとは思えなかった。夢で見た光景が脳裏に浮かぶ。スペードのキングの剣が闇に光り――

「ところで……管理人さんが言ってましたが、事件に骨董品が関係してるんじゃないかって話、我々もその線で調べてみたところ事件解決のとっかかりのようなものが見えましてね」

「とっかかり……」と、立花は惚けたように呟いた。悪い予感がする。

「滝田さんが働いていた『ジョーカー』のマスターが教えてくれたんですが、滝田さんは古いトランプを持っていたそうです。凝った意匠の箱に入っていて、かなり価値があるのでは、とマスターは言っていました」

やはりあのトランプだ。警察がそこまでたどり着くのは想定済みだった。内心はビクリとしたものの、立花は平静の顔を装えた。

「で、そのトランプを探したんですが、滝田さんの部屋にはありませんでした。価値を知っている犯人が持ち去ったのでしょうか。ものがトランプですからひょっとしたら立花さんは心当たりがあるのではないかと思います。最近古いトランプを手に入れたというような人をご存じないですか？」

間をあけては拙い、と立花は思った。ごく自然に、さも何でもないことのように振る舞わなければならない。

「そのトランプって……これのことかな？」

デイパックを開け、トランプの箱を刑事に見せる。

「どうしてこれを？」

坂上刑事は驚き、怪訝そうな目がトランプに釘付けになった。

「もらったんですよ」と、かねてから考えてあった答えを言う。

「もらった？」

「ええ。前に遊びに行ったとき、滝田さんがくれたんですよ」

刑事は納得しかねる顔をしていた。

「マスターの話では、滝田さんは誰にも触らせないほどとても大切にしていたとのことでしたが……それをどうして立花さんに？」

「知りませんよ。くれるって言うからもらったまでです。飽きたんじゃないですか」

「飽きた……ねえ」

刑事が疑いの目で見ると。怯んではいけない。隙を見せればつけ込まれるだけだ。

「飽きたのかどうか分かりませんが、何らかの心境の変化があったのは間違いないんじゃないですか。自信喪失とか。それでマジックを辞めるつもりだったのかもしれませんがね。テレビ出演を断ったくらいですから」

「その話もマスターから聞きました。マスターは残念がっていましたね、せっかくのチャンスだったのって。そうですか。いらなくなったから立花さんにあげた……」

刑事が完全に納得したとは言いがたかった。それでも立花は、自分が優位に立ったのを感じていた。疑念を晴らすときだ。滝田の事件にはこのトランプも、ましてや自分も関係していないと思わせなければならない。

「目の付け所はよかったとおもいますよ。だからトランプを持ち去った者が犯人だと思われたんですが、ちょっと短絡的だったんじゃないですか。実際、骨董品としての価値がどれほどのものか分かったものじゃありませんよ。何なら鑑定に出してみますか？」

立花の痛烈な皮肉に、坂上刑事がむっとする。

「その必要はないでしょう。まあ、短絡的だったかどうかはともかく、立花さんがもらったということであれば、そのトランプは関係なかったんでしょう。別の線から当たらないといけませんね」

「別の線ですか？」

もう疑われてはいないと確信した立花は、余裕を持って訊いた。

「殺害方法です。こちらも頭を痛めていましてね……。滝田さんの知り合いに医者や看護師など、医学に通じた方はいませんでしたか？」

「さあ、いないと思いますけど……」

立花の記憶にはなかった。病院に通っているという話も聞いたことがない。

新聞に滝田の死因は出血性ショック死と出ていた。床にこぼれていた血は僅かで、死ぬほどではなかった。パジャマの下に注射の痕でも見つかったのだろうか。注射で血を抜き取って――闇に光る剣が左の手首に傷をつけ、流れ出る血を黄金色の杯が受け止める。

「いませんか……」と、刑事が肩を落とす。

その様子から察するに、何人からも同じ答えが返ってきたようだ。

「医学関係者を当たるといことは、注射の痕でも？」

刑事は首を振った。

「どうやって血を抜いたのか、さっぱり分かりません。唯一、それらしい傷が手首にあったんですが、傷は治ってから何日も経っているとのことでした。殺害方法は分かりませんが、いずれにしろ医学的な知識がないとできない芸当でしょう、大量の血がなくなっているんですから」

「僕が死体を発見したとき、部屋にはそれほどの血はありませんでした、滝田さんの死体のところに少しあっただけで。大量の血は何処へ行ったんでしょうね？」

杯が血で満たされる。

「トイレにも風呂場にも、部屋の何処にも血を処分した形跡がなくて……。となると、犯人が持ち去ったとしか考えられません」

「持ち去った？ 何のために？」

「さあ、それは分かりません。何かの研究のためなのか、捜査を攪乱するためなのか……」

絵札たちが杯を回し、嬉しそうな笑みを浮かべて血を飲み干す。

「なくなった血は……犯人が飲んだのかもしれないよ」

立花がおどろおどろしく言うと、ふたりの刑事は不快な顔し、おぞましいものでも見るように立花に目をやった。

「まさか、吸血鬼じゃあるまいし。成人男性の場合、身体中の血量はおよそ四から六リットルもあるんですよ。たとえ犯人が三人だとしても、ひとり当たり二リットル近く、とても一度に飲める量ではありません」

三人なら無理だろうが、十二人もいれば可能だ。

「僕は犯人が飲んだんだと思いますがね、滋養強壮のために」

吸血鬼が己の正体を告白したかのように聞こえたのか、ふたりの刑事は虫酸が走るような、ますます険しい顔をした。

「ご協力ありがとうございました」と言い、そそくさと立花のアパートを離れた。

再び疑念を持たれたのは間違いなかった。しかも猟奇的な殺人犯として。それでも立花は小気味よかった。立証する証拠など出てくるはずがないのだから。

不意に立花は、坂上刑事の言った三人という数字が気になった。刑事は複数による犯行と考えているのだろうか。立花のアパートにひとり、滝田のマンションにふたり。そのふたりのうちのひとりが滝田を押さえつけ、もうひとりが電話を切った――。どちらかが合い鍵を持っていて、誰かに立花のアパートから電話をかけさせたと考えれば辻褄は合う。

刑事を怒らせるような、余計なことを言ったのではないだろうか、と立花は悔やんだ。証拠がないなら証拠を作られてしまうかもしれない――。

部屋へ入ろうとすると、藤田から電話があった。

演芸ホールへ来てくれたバイト仲間で飲んでいるらしく、今から来ないかと誘ってくれた。

「忙しそうだったし、疲れているだろうから立花を交えてのお祝いはまた今度にしようって言ったんだが、皆が承知してくれなくて。やっぱり主役がいないとな」

嬉しくて涙が出そうになった。もうじきスーパーは辞めることになるだろうが、藤田たちとは一生付き合っていこうと思った。

「すぐ行くよ。三十分もあれば着く」

立花は踵を返し、大急ぎで駅へと向かった。

レジ係の志津香も来ているとのことだった。密かに応援してくれていたのだろうか。誰かの誘いを断り切れなかっただけかもしれないが、思いもしなかっただけに、立花はどきりとした。志津香に好意を抱いていることは誰も知らない。志津香はスーパーで働き始めたときにはすでに婚約していた。来年結婚するらしい。

居酒屋での飲み会は当然のごとく、小西主任の悪口で盛り上がった。誰も彼もがその傲岸不遜な態度を非難する。四十を過ぎているのに主任にしかねれないと馬鹿にし、お見合いが何度も失敗していることを嘲笑する。立花も同調に逡巡はなかった。いなくなってくれればと思っている。それは他の者も同じだった。何とかして辞めさせられないだろうか、そんな陰謀めいた話が持ち上がった。しかし、バイトごときに出来るはずもなく、鬱屈とした空気が辺りを包む。その空気を払拭したのは志津香の結婚話だった。皆が祝福し、志津香を冷やかす。婚約者とのなれそめや、結婚生活の青写真を訊き出す。立花もその中に加わった、胸中の思いを誰にも悟られないようにして。

しこたま飲んだ。楽しい酒だった。しかし酔えなかった。心に引っかかるものがあり、それが絶えず立花の頭の中を巡っていた。

トランプが意思を持って自由に動き回る――そんなことはあり得ない。だが確かにあのとき、四枚のキングはそろった。あり得ないことが現実起こった。奇跡的な偶然かもしれない。が、それで片付けにはあまりにも時宜にかなっていた。何らかの意思が働いたとしか思えない――。

アパートに帰った立花は、すぐに目の前のテーブルにトランプを置いた。キング、クィーン、ジャックを三列に並べ、穴の開くほど見つめる。

「動いてみろよ」と、命令口調でトランプに呼びかける。

しかしトランプの絵札は、立花を嘲笑うかのように微かな変化も起こさない。

床に仰向けになり、立花は虚しく天井を眺めた。思考の迷路から抜け出せず、自分がどうにかなりそうだった。

トランプが勝手に動き回るとでもいうのか。人を傷つけ、殺すとでもいうのか。その血を飲むとでもいうのか。現実とは思えない。現実であるはずがない。だが、マジックが上達したのは事実だ。夢でも何でも無い現実だ。

「そう、現実だ。すべては現実だ」

聞き覚えのある野太い声がした。スペードのキング――怖くはなかった。いつの間にか眠ったのだろうか、蛍光灯の明かりはこれが夢であれ現実であれ、立花に安心感を与えた。

起き上がろうとする。が、またしても身動きがとれない。ジャックたちがよってたかって押さえつけている。口を塞がれていないのは、大声を出す恐れがないと知られているからだろうか。それとも、そんな夢を見ているに過ぎないのだろうか。

「そろそろ信じる気になったか？ 起こっていることはすべて現実だ。すべて農らの力によるものだ。信じようと信じまいと構わんが、農らは農らの流儀でやるだけだ」

スペードのキングが不遜の顔で、宙から見下ろしていう。

明かりの下でハッキリと見えるようになったその衣装は、派手派手しく、絢爛豪華だった。だが、あまりにも時代がかっていて滑稽な感じがしないでもない。立花は以前付き合っていた彼女に連れられて観に行ったシェイクスピア劇を思い出した。ハムレット——生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ——有名な台詞が頭をよぎる。

「滝田さんを殺したのも現実なのか？」

「ああ」

「どうして？」

「それが儂らの流儀だからだ。お前にも言っただろう、裏切ったら殺す」

「裏切らなければ？」

「お互いにとってのいい関係が続くことになる」

成功を与える代わりに、ずっと血を提供しろということだ。

「成功を与えるだけじゃないぞ」

心の方が聞こえたかのようにスペードのキングは言った。言葉を続ける。

「憂いや屈託を取り除いてやろう。お前には幸せになってもらわなければならないからな」

幸せにしてくれるのはありがたいが、親でもないのに、そこまでしてくれる理由が分からない

。

「どうしてそんなに親身になってくれるんだ？」

キングがニヤリと笑う。それは不気味な陰を帯びていた。

「血が旨くなるからだよ。子供のように無邪気で、屈託のない者の血は極上の味がするからな」

やつらはただ血を飲むだけではなく、味わっていやがる。嫌悪感が立花を包んだ。

「いつまでつきまとうんだ？」

成功を勝ち取った暁には、こいつらとはおさらばしたい。いつまでも血を提供させられては堪らない。が、そんな考えは虫がよすぎたらしい。キングの顔がみるみる不快に歪んだ。

「つきまとう？ つきまとうと言ったのか？」と、凄んでみせる。

立花は怯んだ。

「いや、いつまで関係が続くかということだよ。まさか一生ってことはないだろう？」

「関係を終わらせたいのならいつでもいいぞ。その代わり掴みかけた成功は終わることになる」

そうだった。こいつらがいなければ成功は覚束ない。

「そして……」と、キングは言葉を続けた。

「命も終わる」

キングの薄ら寒いひと言に、立花は心臓が凍りつく思いがした。

「そんな……。それじゃ死ぬまで関係が続くことになるじゃないか」

「これから先、ずっとお前の幸福のために尽くしてやろうというのに……不満なのか？」

「そうじゃないが……」

不満だった。だが、そうは言えない。言わなくとも立花の底意は見透かされていた。

「まあ、今は不満に思っているでもいいだろう。まだ確かな成功を手に入れたわけでもないし、幸福を実感してもいないだろうからな。しかし、明日には感謝するようになる」

「明日？ どうして明日なんだ？ 今夜、何かやったのか？」

キングが不気味な笑みを見せる。

「ふふふ。それは明日のお愉しみだ。また血をもらおうぞ。持ちつ持たれつだからな」

スペードのキングが剣を立花の手首にあてがい、ゆっくりと引く。杯に血がしたたり落ちる。「儂らにわだかまりを抱くな。従順であればお前を助けてやる。名誉は欲しいままだ」杯の血を次々と回し飲みし、スペードのキングは蛍光灯の明かりの中に、フッと消えてしまった。他の絵札も続き、クローバーのジャックが最後に残った。

「これは夢だろ？ 現実なんかじゃない。お前たちは現実には存在しない、そうだろ？」ベッドから見上げて立花は言った。目蓋が重い。夢の中のはずなのに、眠りに誘われる。「まだそんなことを言っているのか。起きていることが現実なのか、そうじゃないのか、それはお前が死ぬときになれば分かる」

クローバーのジャックはせせら笑い、消えていった。

朝になっていた。

蛍光灯を点けばなしで眠ったらしい。左の手首に目をやる。うっすらとした傷痕が二本になっていた。これを見れば誰しもが心を病んだ末の自殺未遂――リストカットの痕と思うだろう。

心を病んでいるからあんな夢を見たのだろうか。

テーブルに置かれたトランプに目をやる。

ふと思いつき、立花はトランプを箱から取り出すと、スペードのキングを束の一番下に持っていき、そのままテーブルの上に置いた。手を翳し、スペードのキングが一番上に来るように心の中で念じる。滝田が見せてくれた技だ。魔法のような技、滝田にあれができたのは実際にトランプが自在に動いたからかもしれないと思い、同じことをしてみた。果たしてスペードのキングが一番上に移動していた。他のカードで試しても簡単にできた。信じるだけでよかったのだ。立花はもう疑わなかった。すべては現実だった。

信じてさえいれば成功は約束され、幸福は保証される――。

雑念を振り払い、トランプたちへの忠誠を胸中で誓いながらバイト先のスーパーへ行くと、異様な雰囲気を感じられた。始業前の忙しい時間なのに、誰も彼もがひそひそ話をしている。立花が朝の挨拶をしても、その反応は鈍かった。避けるような目線、冷ややかな微笑――理由は分からないが、忌避されているのを立花は感じた。

事務室への通路に藤田と中川がいた。

「何かあったのか？」と訊く。

「驚くなよ。夕べ、小西主任が殺された」

藤田が沈痛の面持ちで答える。

「殺された？」

「ああ。それで話を訊きに刑事が来ているんだ。事務室にいる。詳しいことは教えてくれなかったが、寝ているところを殺されたらしい。俺たちの聴取はいま終わったばかりだ」

トランプたちの仕業だ。小西主任がいなくなれば――そう思っていた。だからやつらは短絡的に実行したに違いない。

「夕べのアリバイとか訊かれたが、しかし、何だって立花の知り合いのマジシャンが殺された日のアリバイまで訊かれたんだらうな。訳が分からないよ」と、中川が少し憤慨して言う。

三人だ――と立花は思った。坂上刑事は滝田の事件の犯人を少なくとも三人と見ていた。ふたりの協力者を藤田と中川と目しているのだろうか。立花の近くで二つの殺人事件が起きた。立花は自分が二つの事件に深く関わっていると思われても仕方がないのを悟った。みんなの様子がおかしかったのはその所為のようだ。

「刑事は疑ってばかりだからな、気にすることはないよ」

「俺たちはまだいいが、立花は大変だな。前の事件のことでもまだ疑われているんだろ？」

「まあな」

「それで殺人事件が続いたんじゃますます疑われてしまうな。俺たちは信じてるよ、立花は何も関係ないって」

関係ないと声を大にして言いたかったが、何も関係ないとは言いがたい。信じてくれる藤田たちに本当のことを話そうかと思ったが、やはりそれはできなかった。

「小西主任が殺されたのはタベなんだろ？ だったらアリバイがあるじゃないか。タベは一緒に飲んでいただから」

「ところがそうでもないんだ」

中川が腕時計に目をやる。

「もう仕事にかからないとな。とにかく頑張れよ。刑事なんかに負けるな」と言い、ふたりは持ち場の総菜コーナーへ向かった。

アリバイが成立しないのはどういうことなのか。藤田たちと飲んだあとすぐに家に帰り、ランプに呼びかけても何の反応もなかった。小西主任が殺されたのはその時間だろう。おそらく夜中の十二時前後。居酒屋を出たのが十一時半。小西主任の家までおよそ五十分。殺された時間にはたどり着けないことになるはずだが――

事務室のドアを開けると、店長が立っていた。事務員たちが邪推するような目を向ける。

「小西主任の話は訊いたか？」

「ええ」

「刑事さんたちが簡単に話を訊きたいそうさ。知っていることがあったら包み隠さず話すんだぞ」

簡単に済むはずがないと思いつつ、立花は店長の後に続いて応接セットにいる刑事たちの元へ行った。殺された小西主任に代わって今日は店長が刑事たちの世話役らしい。

「倉庫係の立花君が来ました。次の者が来ましたらまたせておきますので」と言う店長の目線の先にいたのは坂上刑事だった。

「それにはおよびません。今日はこの辺で終わりにしますから」と、柔和な顔で言う。

隣には池谷刑事がいた。メモ帳の新たなページを開いている。

店長が出て行くと、坂上刑事は真顔になった。

「昨日の夕方会ったばかりだというのに、また同じ顔を見るとは思いもしませんでした」

それはこっちも同じだ、と言ってやりたくなる。

「夕べの僕のアリバイを訊きたいんでしょ？ 残念ながら僕にはアリバイがありますよ。藤田たちから聞いたと思いますが、一緒に飲んでいましたからね」

「昨日お話を伺ったあと飲みに行かれたそうですね。お祝いの宴だったとか」

「楽しい飲み会でしたよ。そのあと僕はまっすぐ家に帰りました。たとえ小西主任の家に向かっていたとしても五十分はかかります。だから僕には不可能なんですよ」

「確かに昨日行かれた居酒屋から小西さんの家までは五十分くらいかかります。ですが……それでアリバイが成立とはならないんですよ」

「どういうことですか？ 時間的に無理でしょう、三十分で着くはずがありませんから」

坂上刑事は訝しい表情をしたあと、我が意を得たとばかりにほくそ笑んだ。

「それじゃ逆に訊きますが、犯行時間をいつだとお考えなんですか？」

「えっ？」

犯行時間は夜中の十二時前後ではなかったようだ。下手なことを答えてはまずい気がした。立花は苦し紛れの言い訳をした。

「ああ、勘違いしてました。滝田さんが殺された時間は真夜中でしたよね。それとごっちゃになってしまったんですよ」

その答えが通用したのかどうか、立花はそっと坂上刑事を上目遣いに見た。通用していなかった。冷たい目がしっかと見返す。

「ごっちゃになったということは、二つの事件に関連性があると思っておられるようですね」

「僕にそんなことが分かりっこありませんよ。でも警察は関連性があると考えてるんでしょ？ 何しろ僕は二つの事件の被害者と知り合いですからね、偶然にも」

「関連性があるかどうか、今のところはまだ想定されておりません。ちなみに、小西主任が殺された犯行時刻は夜中の一時から三時頃です。その時間は家にいらしたんですか？」

滝田の場合と違って、時刻を特定できるような材料がないのだろう。

「ええ。寝てました」

「家にいたのを証明できる方はいらっしゃらないんでしょうね？」

立花の答えを先回りしたかのように刑事が訊く。

「いませんよ」

「ということは……アリバイは不成立ですね」

「そういうことになりますね」

立花は自嘲の笑みを漏らした。

「小西さんを恨んでいた人物に心当たりはありませんか？ 最近トラブルがあったとか。もちろん最近でなくてもいいんですが」

「そう言われましても……」

「たとえば勤務態度を注意されて逆恨みしているとか？」

自分を念頭に置いて訊いているのが立花にはすぐに分かった。前に尋問に来た際、小西主任が立花をサボリ癖があるかのように、悪し様に言っていたのを覚えていたのだろう。

「死者に鞭打つようであれですが……小西主任は誰からも好かれてはいませんでしたよ。ハッキリ言って嫌われていましたね。恨んでいる人なんて五万といますよ。職場だけでなく、近所でもトラブルがあったんじゃないですか？」

「そんな話は聞こえてきていませんね。おおむね評判は良さそうですよ。地区の清掃とかにも率先して参加なさっていたようで……。が、こちらでは違っていたようですね。他の人からも芳しい話は聞かれませんでした。仕事熱心なあまりいろいろと注意なさって疎まれたんでしょうね」

「仕事熱心だからじゃありませんよ。ただの八つ当たりですよ、あんなの」

「あんなの……とおっしゃいますと？」

声が意地悪く響き、心持ち刑事が身を乗り出したように見えた。

「いやあ……あれですよ。刑事さんもお覧になったでしょ、前に来られたときに。僕がサボっているかのように小西主任が言っていたのを」

「ええ、見ました。お仕事でしたから申し訳なく思ったものでした。今日もそうですが、何度もお話を伺って心苦しい限りです。それで……あのあと小西さんと何かあったんじゃないですか？」

「何もありませんよ。陰険な目で見られましたが、僕は無視していましたから」

「辞めて欲しいと思ったでしょうね？」

「そりゃまあ……。でもそんなの僕だけじゃありませんよ」みんな思っていました」

「お祝いの宴の席で小西さんを辞めさせるような話が出たとか」

誰が言ったんだ。口の軽いやつめ。

「出たのは事実ですが……」

「言い出したのは誰です？」

「さあ、覚えていませんよ」

「あなただったんじゃないですか？」

僕が言い出しました、辞めさせられそうにないので僕が殺しました——そう言わせようとして
いるのだろうか。

「違いますよ……多分」

「自信がないようですね」

「酔っていましたからね。何を言ったかいちいち覚えていませんよ。ひょっとしたら僕が言い出
したのかもしれませんが、だからといって、それだけで殺人事件に結びつけるのは強引じゃ
ないですか？」

「立花さん、あなたの場合はそれだけじゃありませんからね。滝田さんの件もありますから」

「どうあっても僕を犯人にしたいようですね」と、立花は捨て鉢に言った。

「疑っているのは否定しませんよ。ですが……二つの事件は関係がないのかもしれない、という
のが大方の見解でしてね。状況があまりにも違いますから。犯人が意図的に、関連づけられない
ように謀ったのかもしれませんが」

「状況が違う……とおっしゃいますと？」

立花が訊くと、刑事は、知っているのに惚けるのかといった顔をした。

「まず、ひと言で言ってあまりにも残酷でした。滝田さんの場合はほとんど傷がなかったのに、小西さんの遺体にはこれでもかと刺し傷がありました。十ヶ所以上も刺されていて、めった刺しです。犯人はかなりの恨みを抱いていたんでしょうね」

確かに違っている。やつらが小西主任にそんなにも恨みを抱いていたとは思えないが――。

「まず、とおっしゃいましたが、他にも何か？」

「血ですよ。辺りは血の海でした。滝田さんの部屋には床に零れた血がほんの少しだけあっただけでした。犯人が持ち去ったのか、それとも立花さんの言うように飲んだのかは分かりませんが、血を奪うことが犯行目的の一つだったかのようでした。ところが今回はまるで必要がないかのように、流れるままに打ち棄てられていたんです」

刑事の顔は、あなたが我々の目を欺くためにそのように謀ったのでしょうか、と言っている。

どうしてやつらは流れ出る血を飲まなかったのだろうか？

黙考する立花に一つの光景が浮かんだ。休憩室で煙草を吸う小西主任を何度か見かけたことがある。ヘビースモーカーだったのだろう、何本も立て続けに旨そうに喫していた。

「不味かったんだな……」と独りごちる。

それは無意識に出た、ほんのささやかな呟きだった。だが坂上刑事は聞き逃さなかった。

「不味かった？ 不味かったとおっしゃいましたね。どういう意味です？」

「何でもありませんよ」

微かな狼狽を覚えながら立花は言った。

血が不味かった、だから犯人は飲まなかった、そういうのは簡単だったし意趣返しもしたかったが、余計な言葉を吐くのはもうやめようと思った。以前にも増して心証が悪い。からかわれていると思われ、怒らせてしまったらそれこそ犯人にされかねない。

「何でもなくはないでしょう」と、刑事は食い下がった。

「本当に何でもないんです」

「何か隠してますね？ やはり立花さんは何かご存じだ。犯人ではないにしても、何か知ってるんでしょ？ 違いますか？」

立花は黙りを決め込んだ。暗に何かを知っていると認めてしまうことになるのは分かっていたが、そうする方が賢明だと思った。いったん口を開いたら、刑事が信じてくれるはずのない話をしそうだった。

坂上刑事の視線が動いた。つられて立花も動かした。すると、事務室のドアのところに店長が立っていた。その後ろにはレジ係の志津香もいた。何故だか切なげに俯いている。

「刑事さん、申し訳ありませんが、そろそろ終わりにしてもらっても構いませんか？ 倉庫の方がてんやわんやで」

「ああ、気がつきませんで、済みません。もう終わりましたから」

刑事たちが立ち上がり、帰り支度を始める。そのさなか、坂上刑事が立花に耳打ちした。

「これで終わったわけではありませんから」

立花も立ち上がった。坂上刑事の言葉を聞き流し、その目は一点を見つめていた。志津香がどうしてここに来たのか、それが気になっていた。志津香も尋問に呼ばれたのだろうかと思ったが、そうではなかった。

「あっ、刑事さん。まだ帰らないでください。レジ係の古賀さんなんですが、ちょうど警察の方がお見えということで、相談したいことがあるそうです。よろしいでしょうか？」

刑事たちを制し、店長が志津香を紹介する。

立花と入れ替わって志津香が応接セットの中に入り、お辞儀をする。立花は応接セットを離れた。しかし、事務室からはまだ出なかった。ぐずぐずして聞き耳を立てる。

「ご相談したいこととは？」と、坂上刑事が訊く。

伏し目だった志津香が、おもむろにその瞳を坂上刑事に向けた。

「小西主任のことでお忙しいところ、私事で恐縮なんですけど……実は、婚約者と連絡が取れないんです。電話しても出ませんし、メールも返事がありません。こんなことはいままで一度もありませんでした。彼の身に何かあったと思えてならないんです」

志津香の目から涙がひとしずく流れる。

「いつから連絡が取れないんですか？」

「夕べの夜中からです。夕方は電話に出てくれました。次の休みは何処へ行こうとか、そんな話をして電話を切ったのは七時頃です。そのときはまだ会社において、これから帰ると言っていました。いま帰ったとメールがあったのが八時過ぎ。寝る前にわたしからお休みなさいのメールを送ったんですが、いつもならまだ起きている時間で、すぐに返信メールがあるのに夕べはなくて、変だなと思って電話したんです。そしたら全然出てくれなくて……」

「正確には夜中の何時頃でしたか？ 彼にメールしたのは」

志津香が握りしめていた携帯を確認する。

「一時十三分です」

小西主任が殺されたのとだいたい同じ時刻だ。立花は嫌な胸騒ぎを覚えた。

「そのあと電話をなされたんですね？」

「ええ。その電話は……」と、志津香は再度確認した。

「一時十八分です。出てくれなくて、留守電に、折り返し電話してって入れて切ったんですが、どうしても気になってもう一度かけました。それが一時二十五分です。今朝もかけましたが、やっぱり出ませんでした」

「ということは……彼は家にいたのに、突然、電話に出られなくなったということになりますね。確かに妙な話だ、ご心配になるのも肯けます。早速、調べさせましょう。ああ、その前に、彼の会社には電話してみましたか？」

「いいえ、電話しづらくて。社内恋愛禁止の会社だったものですから」

「事情がおありのようですね。ですが、出社しているかどうか、確認してはどうですか？ ひょっとしたらいるかもしれませんよ、何でもなかったかのように」

坂上刑事が安っぽい気休めを言う。

懐疑的な顔で志津香が彼の会社に電話していると、振り返った店長と目が合ってしまった。

「何だ、まだいたのか。早く倉庫に行かないか」

店長に睨まれ、立花は後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、事務室を出て行った。

まさかやつらも志津香の婚約者にまでは手を出さないだろう。

倉庫内は戦場のような有様だった。まさに猫の手も借りたい忙しさに、立花は無心で働いた。しかし、次から次へとやってきた納品車はその数を減らし、倉庫内に落ち着きに戻ると、どうしてもタベ何が起こったのかを考えずにはいられなかった。

小西主任を殺したのはやつらでまず間違いない。殺したいほど憎んでいたわけではないが、旨い血を飲みたいがために、幸福にしてやるというやつらの論理からすると、いなくなって欲しい、イコール死んで欲しいとなったのだろう。だが、志津香の婚約者は、その顔も名前も知らなかった。憎いと思ったこともなかった。心の奥底で微かな妬みは抱いたかもしれないが、それだけのことだった。いなくなって欲しいとも思わなかったし、志津香のことは縁がなかったんだと諦めてもいた。しかし、やつらの論理からすると、幸福を手に入れるのを阻害する邪魔者として映ったのかもしれない。血が旨くなるためには、志津香の前から姿を消してもらわなければならない、と考えても不思議ではない。

果たして志津香の婚約者の消息は――

それが分かったのは昼休みだった。

立花が志津香から話を聞こうと売り場内をレジへ向かっていると、藤田たちがやってきた。

「ちょうどよかった。飯に誘おうと思ってたんだ」

「ああ、いいよ。でもその前に、ちょっと行きたいところがあるんだ」

「何処だ？　すぐに済むのか？」

「古賀さんのところだよ。婚約者がいなくなったらしくて、心配なんだ」

藤田と中川が顔を見合わせる。

「知らなかったのか？　古賀さんは早退したぞ。婚約者は……いなくなったんじゃないで、殺されたらしい。警察が来て古賀さんを連れて行ったよ。ちらっと見えたんだが、うなだれて泣いていた。可哀相だったな」

「そうか。殺されたのか……」

立花は嘆息した。むごい。あまりにも痛ましい。

殺したのがやつらとは限らない――そう思ったかったが、それは虫がよすぎるだろう。志津香がすぐに婚約者の死を推察しなかったことからすると、婚約者が誰かに殺されるほど恨みを買っていたとは思えない。やつらが殺したに決まっている。そして、殺したとなればその理由はただ一つ、旨い血を飲むのに邪魔と見なされたからだ。

自分の所為ではない、やつらが勝手にやったことだ。自分は悪くない――。

ふっと囁く声が出た。それは内なる自分の声だった。立花は耳を傾けたくなかった。何を言わんとしているのかは分かり切っていた。囁く声が次第に大きくなり、耳を聳せんばかりに頭の中で鳴り響く。

お前が殺したんだ！

「どうした？ 大丈夫か？ 顔が真っ青だぞ」

立花は声のした方に目をやった。今度は確かに鼓膜を通しての声だった。藤田が心配そうに立花の顔を覗き込んでいた。

「具合が悪いのか？」と、中川の声もした。

「ちょっと気分が……」

立花は自分でも思いもしなかったほどの弱々しい声しか出せなかった。

「帰った方がいいんじゃないか？ 刑事にあれこれ訊かれて疲れているんだよ」

「早退するほどじゃないよ。けど……昼飯は食べられそうにないな」

「そうか。くれぐれも無理するなよ」

藤田たちは立花を置いて昼飯に出かけた。

残された立花は近くの公園へ行った。食欲がなかったのは事実だが、それよりも藤田たちとともにいたくなかった。一緒に昼飯を食べに行けば、その席でさっきの話を続きが出るのは必至だった。自責の念に駆られ、気の置けない藤田たちにすべてをぶちまけてしまうかもしれなかった。そうしたいのは山々だったが、話したところで信じてくれるはずがないし、最悪、頭のおかしいやつと思われかねない。

公園には立花の他に二人組のOLがいた。立花の存在など眼中にないようで、サンドウィッチを頬張りながら、声を立てて笑っている。何処をどう見ても彼女たちは幸せそうだった。

やつらは彼女たちの元へ行けばいいのに。そしたら旨い血が存分に飲めるだろうに。

そう思った立花だったが、すぐにやつらの嘲る声が聞こえてきそうだった。

くすねたのは誰だ？ お前じゃないか。必要としたのはだれだ？ お前じゃないか。手放そうとしないのは誰だ？ お前じゃないか。

時間がきて、立花はスーパーの倉庫へ戻った。

食欲がないまま黙々と仕事をこなし、疲れた身体を引きずるようにして帰途につく。

アパートにたどり着いた立花は、部屋に入ると早速トランプを取り出し、テーブルに置いた。「あんたらがやったんだろ？ 小西主任を殺したのはあんたらだろ？ 志津香の婚約者もだ。あんたらが殺したんだろ？」

トランプは動かない。部屋の中をぐるりと見渡しても、何の変化もない。

「真相を教えてくれてもいいじゃないか？ 本当のところはどうなんだ？」

それでもトランプは姿を現さない。スペードのキングの尊大な態度が脳裏に浮かんだ。

お前ごときに呼ばれたからといって、ノコノコ出てくるほど気安い存在ではないぞ。

「それがあんたらの流儀か？ 頼むよ、出てきて話をしてくれよ」

立花はトランプをじっと見つめた。僅かな変化も見逃さないよう目を皿にしたが、相も変わらず、お前の頼み事など聞く必要はないとでもいうように、トランプはテーブルに置かれたままだった。息を強く吹きかけても、びくともしなそうだ。

突然、ジーンズのポケットが震えた。やつらのことを考えていただけに、腿を剣で刺されたのかと、立花はビクリとした。だがそれは錯覚に過ぎなかった。携帯の呼び出し音が鳴っている。

電話は渡部プロデューサーからだった。五日後に収録が行われるとのことで、その時刻とおおよその内容を伝えてきた。持ち時間は十五分。大物俳優を含む三人のゲストの目前で披露するらしい。何をやるかは立花に任された。

電話を終えた立花はテーブルの上のトランプを眺めながら、当日披露するマジックの演出を考えた。スペードのキングは、信じていけば思いのままに動くと言った。滝田がやって見せた、手を翳すだけでカードを移動させる技も、それを念じれば簡単にできるのだろう。滝田がやって見せた、手を翳すだけでカードを移動させる技も、それを念じれば簡単にできるのだろう。他にどんなことをやろうか。アツと言わせるようなことを披露したいが、何をやったらゲストを驚かせられるだろうか。立花は頭の中でトランプにいろんな動きをやらせてみた。どれもこれも驚愕させられそうだと思った。

テレビ収録前の五日の間に、刑事が二度も訪ねてきた。滝田の事件に続き、小西主任の事件も暗礁に乗り上げているらしい。動機があることから小西主任殺害の犯人と目されていると立花は思っていたが、警察はその疑いを薄めているようだった。

「同時刻に起きた事件が滝田さんの件と酷似してしましてね」

解剖に付された志津香の婚約者の遺体に血はほとんど残っておらず、手首に微かな傷痕があり、玄関ドアには鍵がかかっていた――と、坂上刑事は付け足した。志津香の婚約者は煙草を吸わなかったのだろう。

警察は滝田の事件と志津香の婚約者の事件とを連続殺人事件とみているようで、小西主任の事件は別の犯人がいると考えているようだ。ほとんどそっくりと言ってもいい事件が起きたのだから、警察の方針は当然だろう。志津香の婚約者が殺された時間にアリバイのない立花は、ますます窮地に立たされたのを感じた。が、決定的な証拠があるわけではない。志津香の婚約者の事件に関しては状況証拠すらもない。被害者と立花との間には接点がなく、しいてあげれば同じスーパーに勤める志津香の存在だが、関係性の弱さは否めない。警察はおきまりの、三角関係のもつれを持ち出したが、そんなものがなかったのは明らかだった。ふたりの関係が良好だったのは誰しもが認めるところで、立花が横恋慕した事実は露ほどもなかった。それでも坂上刑事は自説に固執した。

「男と女の仲なんて、端で見るのと実際とでは違うことがままありますからね」

志津香が事件に関与し、立花が共犯者なのを示唆するかのように、立花には聞こえた。

立花は激怒した。しかし顔には出さなかった。内に秘め、ぐっと怒りを抑えた。やつらが坂上刑事たちにまで剣を突き立てかねない。心の中で、警察関係者を殺して欲しいなんて思っていないから、とやつらに向けたメッセージを唱えた。

二日後に来たときはただの世間話で終わった。穏やかな表情さえ浮かべ、事件が解決したかのようにだった。だがそうではなく、顔を見に来ただけだと言った。何らかの意図が感じられた。それは、いつでも監視しているぞ、と宣告したかったのだろうと立花は思った。

志津香は事件のあと、出勤していなかった。しばらく休みたいとのことだったが、辞めてしまおうだろうとのもっばらの噂だった。無理もない。恋人を殺された上、その嫌疑までかけられたのではやるせなくて仕方ないだろう。立花は慰めてあげたかった。元気づける言葉の一つもかけたかった。無理もない。婚約者を殺された上、その嫌疑までかけられたのではやるせなくて仕方ないだろう。立花は慰めてあげたかった。元気づける言葉の一つもかけたかった。だが、それはできなかった。やつらの思惑どおりに動くことには抵抗があったし、打ちひしがれている志津香に付け入るようで卑劣な気がした。何より、やつらが勝手にやったこととはいえ、責任の一端は立花にある。立花が志津香に思いを抱かなかつたら婚約者は殺されなかつたはずだ。死ななかつたはずだ。立花は心苦しかった。悔悟の念が奔流となって押し寄せ、立花を苛んだ。それは小西主任についても言えた。いなくなって欲しいと願ったのは確かだったが、死んで欲しいとまでは思わなかつた。小西主任を憎む気持ちは悼む気持ちに変わっていた。憂慮の中に沈み込んでいた立花はふと、今の自分の血は不味いんだろうな、と思った。とても幸福とはいえず、心痛の日々を過ごしている。結果的に、血を旨くしたいという目論見が外れ、やつらは地団駄を踏んでいることだろう。立花は少しばかり小気味のいい思いがした。そして心中で誓った、もう誰も憎むまいと。たとえ成功を手に入れられたとしても、その所為で誰かが犠牲になつたのでは嬉しくも何ともない。

テレビ出演の当日になった。収録時間の午後五時が迫り、立花は極度に緊張していた。渡部プロデューサーから、驚異の天才マジシャンとして紹介すると聞かされていた。天才でないのは立花がよく知っていた。あのトランプがなかつたなら凡庸なマジシャンのひとりに過ぎない。不愉快なやつらだが、やつらさえいれば無敵のマジシャンになれる、と緊張する自分に言い聞かせる。

楽屋で最後の打ち合わせをする。

司会者は阿部真司。中堅どころで、頭の回転が速いと評判の男だ。彼に任せておけば大丈夫だから、と渡部は言った。あがって多少のとちりをやってもカバーしてくれるということだろう。出演者は他に三人いて、立花もよくテレビで観ている芸能人だった。アイドルの星空夕樹とイケメンタレントの佐久間剛。そして大物俳優の北村謙太郎。立花の胸は高鳴った。すでに自分が一流芸能人の仲間入りを果たせたかのような錯覚に陥った。浮かれた様子が窺えたのだろう、プロデューサーの渡部が釘を刺した。大御所の北村謙太郎は一見温厚そうに見えるが、その実、意外に短気とのことだった。くれぐれもよろしくと言い、立花の肩をぽんと叩いて楽屋を出て行った。

挨拶をしに、他の出演者の楽屋を訪ねる。

アイドルの星空夕樹は立花以上に、丁寧に挨拶を返してくれた。笑顔が愛くるしい。佐久間剛はおどけた笑顔で挨拶してくれ、北村謙太郎は……テレビで観る顔とは違って不機嫌そうにしていた。副業でやっているレストランが上手くいってないという話を思い出し、それが原因かと思ったが、それにしても素っ気ない態度だった。尊大にも見え、何だか馬鹿にされている感じがした。

スタジオは華やかだった。電飾を施したセットが組まれ、色とりどりの鉢植えが並べられている。数十人の観覧客も入っていて、三人の出演者が登場すると歓声が湧いた。そのほとんどは佐久間剛に向けられたものだろう。イケメンの佐久間剛はオバ様たちに絶大な人気を誇っている。星空夕樹は露出の多い衣装に着替えていた。北村謙太郎は満面の笑みを浮かべていた。気分が持ち直したのではなく、テレビ用の顔なのだろう。

司会の阿部真司と三人の出演者が軽いトークをしている。セットの裏にいる立花の耳にまでは届かなかったが、いい雰囲気だ。緊張の中、立花はそのときを待った。そしてそのときは来た。

「テレビの前の皆様、今から凄いことが起こりますよ。彗星のごとく現れた天才マジシャン、立花賢吾君の登場です！」

華々しい音楽が鳴り響き、立花は颯爽とステージ中央へ歩いた。一世一代の晴れ舞台に高揚し、拍手をする観覧客の顔がどれもこれも同じに見える。立花は密かに深呼吸した。出演者たちの前に黒いクロスを掛けたテーブルがあり、ゆっくり近づくと、三人は拍手で迎えてくれた。星空夕樹は、何が始まるのかしらと好奇心に目を輝かせ、佐久間剛は、トリックを暴いてやるぞと意気込んだ顔をしている。北村謙太郎は、どうせたいしたことはないだろうと斜に構えている。

立花は例のトランプの箱をテーブルの端に置いた。中からトランプを取りだし、中央に置く。上手くやってくれよと祈りの目で見つめる。

挨拶代わりにカードさばきを終わると、トランプの束から夕樹に一枚のカードを選ばせた。他の出演者とカメラにも確認させる。裏向きにしたカードの束の中ほどに戻させ、立花は、一番上に移動しろと念じた。手に持ったカードの束の一番上を夕樹にめくらせる。と、中ほどに入れたはずのカードが瞬時に、一番上に移動していて、夕樹が目を瞠らせた。観覧客の歓声が沸く。佐久間にも同じことをやってもらった。順調だった。トランプは思いのままに動いてくれている。

北村謙太郎にもやってもらい、一番上のカードがめくられる。が、そこにあったのはまったく別のカードだった。失敗したのかと北村が嘲るような笑みを浮かべる。立花はカードの束をひっくり返した。すると、束の一番下に北村の引いたカードはあった。

「北村さんに恐れをなして一番下へ行っていましたね」

観覧席からクスクス笑いが起き、北村も苦笑いをした。

もちろん、一番下へ移動しろと念じていた。狙いどおりに笑いがとれ、立花は満足した。

夕樹にトランプの束を渡す。

「これから先、わたしはトランプに指一本触れずにマジックをやります。それじゃ星空さん、何でもいいですからカードを一枚選んでください」

夕樹は手に持ったカードの中からクラブのジャックを選んだ。

「そのカードを束の一番下にして、テーブルに置いてください」

言われたとおりに夕樹がする。

「一番上のカードを覚えていますか？」

一番下のカードがクラブのジャックなのは分かっているが、一番上が何かまでは知らない夕樹は、困惑の顔をした。

「めくって教えてください」

マジックの進行上、一番上のカードも確かめる必要があるのだろうと、夕樹は軽くめくった。クラブのジャックがいきなり現れ、お化けを見たような顔になる。観覧席からも、ええっ、と驚きの声が漏れた。これほど早くマジックが完結するとは思っていなかったようだ。そして、トランプはずっと夕樹の手の中であって、立花が何かをするのは不可能だったことにも驚嘆したようだった。

「凄いね、夕樹ちゃん。立派なマジシャンじゃないか」と、佐久間が揶揄して言う。

「わたしは何もしていません。クラブのジャックが一番下にあったはずですが……」

佐久間の言葉を真に受け、信じられないといった顔で夕樹が言う。

「皆さん、拍手をお忘れですよ」

司会者の阿部の声で、我に返ったかのように拍手が湧き起こる。

「次はちょっとしたゲームをしたいと思います。佐久間さん、よろしいですか？」

「ええ、いいですよ」と、佐久間が身を乗り出す。

「ダイヤのジャックとクィーンとキングの三枚を表にして、テーブルに右から並べてください」

佐久間が一枚ずつ、丁寧に置く。

「裏返してください」

佐久間は三枚のカードを裏返した。

「題して“ジャックを追い詰めろ”ゲームです。佐久間さんは、記憶力はいい方ですか？」

「どうですかね。そんなに悪くはないと思いますけど」

「ジャックはどれでしたか？」

「どれって……これに決まってるじゃないか」

なんと簡単なゲームだろうとでも言いたげに、佐久間は一番右のカードを指さした。

「めくってみてください」

佐久間がめくると、現れたのはクィーンだった。

「あれっ？ おかしいな。右から順にジャック、クィーン、キングと並べたはずだが」

「勘違いは誰にでもあります。これでジャックは真ん中か左のどちらかになりましたね。確率は二分の一です。どっちだと思いますか？ ああ一応、クィーンも伏せておきましょうか」

佐久間はクィーンを元のおりに伏せ、真ん中を指さした。

「こっちのような気がするな」

「勘が当たればいいですね。確率は二分の一。果たしてジャックはどちらでしょうか。それではめくってください」

現れたのはキングだった。

「残念ですね。佐久間さんの勘は外れたようです。ですが、これでいよいよジャックは追い詰められました。さて、ジャックは何処でしょうか？ もう誰にでも分かると思いますが」

「当然ここだよ」と、佐久間は左のカードを指さした。

「めくってください」

めくった佐久間は呆然となった。現れたクィーンに目が釘付けとなり、目の前で起こったことが信じられないといった顔をする。

「ジャックは逃げ切ったようですね。もうどれだかお分かりでしょう、佐久間さん」

テーブルの真ん中にはキング、左にはクィーンがあった。右だけが伏せられている。

「もうこれしかないですよね」

疑心暗鬼になった佐久間が自信なさそうに、北村に訊く。

「何を迷ってるんだ。一枚しかないんだから、それに決まってるだろ」

北村の態度は、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりだった。

「そうですよね」と頷き、佐久間は右を指さした。

「めくってください」

誰もがジャック以外のカードが現れるはずがないと思い込んでおり、めくられたカードに虚を突かれた。現れたのはスペードのキングだった。

スタジオの中に悲鳴にも似た溜め息が漏れる。誰の顔にも、理解不能の文字が書いてあった。

「それじゃジャックは何処へ行ったんだ？ まさか束の中に戻ったとか」

佐久間はトランプの束を調べた。だが、そこにはなかった。

「北村さん、じっとそのまま。動かないでくださいね」

立花の言葉に、皆の視線が北村に向けられた。北村は、何かと身を固くしている。

立花が一步踏み出すと、何かに気づいた観覧客が北村を指さし、ひそひそ話を始めた。やがてざわめきに変わり、ざわめきは立花が北村に近づくにつれ、いっそう大きくなった。佐久間も夕樹も気がついた。二人とも北村の頭に視線を送っている。

「何だよ？ どうしたんだ？」

スタジオの中で事態を把握していないのは北村だけだった。

「北村さん、ちょっと失礼します」

立花が手を伸ばし、北村の頭に載っているダイヤのジャックを取ると、割れんばかりの拍手と賞賛の歓声が起こった。誰も彼もが目の当たりにした奇跡に酔い痴れており、惚けたような表情を浮かべている。

「それでは最後にとっておきの技を披露したいと思います」

立花が言い終わるのを合図に、ウイナワルツの優雅な音楽が流れてきた。

「星空さん、何でもいいですから男女のペアとなるようなカードをテーブルに置いてください」

夕樹はハートのクィーンとスペードのジャックを選び出し、表向きにしてテーブルに置いた。

三拍子のリズムに合わせ、オーケストラの指揮者がタクトを振るように、立花が指先をカードに向けて揺り動かす。すると、二枚のカードはすっと立ち上がり、音楽に合わせて踊り始めた。まるでマリオネットを操るかのよう、立花の指先から見えない糸が出ていて、それが二枚のトランプをひらりひらりと舞い踊らせているように見える。気品溢れる音楽と相まって、さながら小さな舞踏会が開かれているようだ。

またしても観覧席から驚嘆の溜め息が漏れた。

夕樹が憧れの目でうっとりとしと見とれている。佐久間は口をあんぐりとさせ、放心の様子で眺めている。北村は腕を組んでいた。猛禽類が獲物を狙うような目を立花に向けている。

立花が、もっと来いよ、とでもいうように、手を振ってトランプの束に合図した。すると、束の中から二枚、四枚とカードが抜け出て、ついには絵札のすべてがテーブルの上で舞踏を始めた。六組十二枚のカードが踊る様は、まさに舞踏会そのものだった。ときにペアを入れ替えたり、一つの大きな輪となったり、輪が分裂してふたつになったり四つになったりする。そして舞踏会は佳境を迎えた。立花は手をゆっくり上へあげた、浮き上がれと言わんばかりに。誰も彼もが、そんな奇跡のようなことが起こるはずはないと思っているが、目の前で起こって欲しいと願っている。奇跡は起きた。一組、二組と、ペアが次々にテーブルを離れ、宙空へと浮揚し、舞い踊る。スタジオの隅から隅まで舞踏の輪は拡がり、観覧席の上にもやってきた。手を伸ばして掴もうとする不届き者もいたが、それが触れてはいけない聖なるものであるかのように、伸ばした手をすぐに引っ込めた。スタジオの宙空全体を使っての舞踏会は圧巻だった。流れている音楽がいつもの高まりをみせ、トランプの踊りが速く、激しくなる。いよいよクライマックスとなり、音楽が最高潮に盛り上がると、それに合わせて踊っていたトランプの動きは目で追えないほどになった。一つの大きな渦となり、音楽が突然終わりを迎えると、大きな渦はテーブルの上にあるトランプの束に収束した。

スタジオを沈黙が支配する。

誰もが次の展開を予想できずに、声を出せないでいる。

立花が深々とお辞儀をすると、そこでやっとショーが終わったことを実感し、沈黙は破られた。万雷の拍手と轟く歓声。皆が皆、スタンディング・オベーションで、夢のような世界を見せてくれた立花を讃えた。

立花は絶頂の中にいた。歓喜に酔い、世界は自分のものだと思った。

「素晴らしいマジックでしたね。本当に魔法を見ているかのようでしたよ」

司会の阿部が興奮を抑えられず、甲高い声で言う。

「ありがとうございます。自分でもかなり上手くやれたと思います。皆さんのおかげです」

立花がもう一度お辞儀をすると、観覧席から盛大な拍手が湧き上がった。阿部も立花の隣で拍手を送る。立花は拍手に応え、観覧席に手を振った。

「それではゲストの皆さんに感想を伺ってみましょう」

そう言った司会の阿部の顔が掻き曇った。ただならぬ阿部の様子に、立花も異変を感じ取った。阿部の視線の先には北村がいた。腕を組み、難しい顔をしている。納得のいかない態度をあからさまに示している。

「星空夕樹さん、いかがでしたか？」

「もう本当に魔法のようで、感激しました」

「佐久間さんはどうでしたか？」

「いやあ、凄いのひとつですよ。タネを見破ってやろうと思っていたんですが、そんなものどうでもよくなりましたね。感服です」

次の移ろうとする阿部に躊躇いが見られた。盛り上がったままですんなりと番組を終わらせたかったようだが、そうはいかなくなってしまった。重鎮である北村の感想を聞かないわけにはいかない。どう見ても北村は一悶着起こしそうだった。

「北村さんはいかがでしたか？ あまりお気に召さなかったようですが」

北村が鼻で笑う。

「面白かったよ。確かに凄かった」

北村は腕組みのまま、テーブルの上のトランプを見据えていた。

「ですが、何がご不満がありそうで……」

「不満か。不満はあるぞ」

北村の睨むような強い視線に押され、立花は思わず目を伏せた。頭にトランプを載せたことを起こっているのだろう。あれくらいのことで思ったが、怒りの壺は人それぞれ。大御所といわれている割に心の狭い男だ、と立花は軽蔑した。だが、この場を収めなくては放映はあり得ない。忍の一字でひたすら謝るしかないと言った立花は覚悟を決めた。

夕樹も佐久間も、そして観覧席の誰もが固唾をのんでこの成り行きを見守っている。

「どういったところがご不満だったのでしょうか？」と、腫れ物に触るように阿部が訊く。

「彼は……立花君とかいったね、立花君は確かに凄いテクニックを持っている。わたしもあんな風にトランプが舞い踊るのを見て度肝を抜かれたよ。前代未聞のマジックだと思った。それでもわたしは不満だ。それは何故か……。立花君はずっと同じトランプを使っていたじゃないか。どうして他のトランプを使わないんだ？ 新品のトランプ、局が用意したものでいいから、彼が前もって用意したものの以外の、未開封のものも使わなくては本物とは言えんだろう。お客さんに、どうせタネが仕掛けられているだけだ、と思われてしまう。もちろんタネがあっても見事なマジックには違いないが、トランプマジックは指先のテクニックが命だ。彼のために言うんだが、せっかく素晴らしいテクニックを持っているのに、そんな風に思われたら損だろう。新品のトランプでやってこそ、本物のマジシャンといえるんじゃないのか」

思い出したように、観覧客がうんうんと頷く。

「そういえば同じトランプでしたね。さすが北村先生、よく気がつかれましたね」

佐久間が北村に額を寄せ、ヨイショでもするかのように言う。

立花は顔が青ざめるのを感じた。流れが悪い方へ向かっている。

「ああいった意見がありますが、どうします？ 立花さん。新品のトランプはこちらですぐに用意できますよ」

司会の阿部の目は、他に選択肢はないと言っている。

「おっしゃることはごもっともですが……」

想定していなかった。他のトランプでなんてできるわけがない。もし他のトランプを使ったら、凡庸なマジシャンに成り下がってしまい、スタジオをしらけさせてしまうだろう。

「なにもさっきのトランプが舞い踊るのをやれと言ってるんじゃない。あれはそれなりの準備が必要だろうからな。簡単なものでいいんだよ。指先のテクニックだけで君がどれだけできるか、それが知りたいんだ」

北村がいたぶるように言う。

スタジオの隅にいた渡部プロデューサーが、いつの間にか観覧席のすぐ横に来ていた。スタッフのひとりに何やら耳打ちしている。そのスタッフが何処かへ走って行くと、渡部プロデューサーは立花に向けて大きく口を開けた。

やれ。

まさに無言の圧力だった。

やってもやらなくても結果は見えていた。やれば凡庸なマジシャンだとバレてしまうし、やらなければそれを認めてしまうことになる。

何処かに行っていたスタッフが走って戻ってきた。手にトランプを持っている。渡部と一言二言、言葉を交わすと、テレビカメラから隠れるようにして、持っていたトランプを司会の阿部に手渡した。しっかりと封印された新品のトランプだった。

「弘法筆を選ばず、ということわざもありますからね。ちょっとだけやってももらえませんか？」

阿部は新品であるのをアピールすべく、トランプの箱を掲げてその封をゆっくり破いた。五十二枚のカードを広げて見せ、同じカードがないのを証明する。それでも飽き足らないのか、不審な点がないかを調べさせるために、トランプを北村に渡した。不満を口にした北村のご機嫌取りもあったのだろう、北村が納得しなければ話は前へ進まない。

北村がトランプを受け取り、ためつすがめつ調べる。お前も調べるかと、佐久間にトランプを渡そうとした。佐久間は、結構ですと囁き、司会者に渡すよう北村に促した。

トランプは司会の阿部の手に戻り、そして有無を言わず、立花の手に渡った。

絶体絶命だった。この期に及んで断れない雰囲気だった。

立花は、やるしかないと腹をくくった。凡庸とのそしりを受けたとしても、放映中止だけは免れたい。放映さえされれば、他のトランプでできないことなど、些末なことになってしまうだろう。

手を触れない技は無理だが、他の技ならできる。指先の感覚を信じてやれば、別のトランプでも上手くいくはずだ――。

だが、淡い期待はもろくも崩れた。焦れば焦るほど何をやっても上手くいかず、ボロボロだった。凡庸のマジシャン以下で、しまいにはトランプを落とすという失態まで演じてしまい、惨めだった。恥ずかしくて、一刻も早くこの場を去りたかった。

観覧客の落胆の声と失笑が胸を刺し、立花は顔を上げられなかった。

スタジオはしらけるどころか、いい夢を見ていたのに無理矢理起こされたような、不機嫌な空気が漂っていた。

怒り心頭の北村が席を離れ、渡部プロデューサーも元につかつかと歩み寄る。

「何だ、あれは！ 素人じゃないか。どうなってるんだ？ 俺は暇じゃないんだぞ！ あんなもの見せやがって、時間を損した。こんな番組は中止だ！」

渡部プロデューサーは平身低頭だった。怒って帰ろうとする北村を必死になだめる。それでも北村はいっこうに怒りを収めようとせず、引き留める渡部の腕を振りほどいて楽屋へと向かった。

顔を真っ赤にした渡部が立花の元へ飛んできた。

「とんだメガネ違いだったよ、まったく。とにかくお前も来い。一緒に北村さんに謝るんだ」

反論の隙を与えず、渡部プロデューサーは立花の腕を取ると、北村の楽屋へと引っ張った。ついていくしかない立花は、不本意ながらも従った。下手くそと非難されるのは仕方がないとしても、絵札たちの華麗な舞まで否定されるのは承服しかねた。一度は感嘆しておきながら、まるでなかったかのように消し去られることには理不尽な思いがした。

渡部が楽屋のドアをノックすると、北村は四十がらみの男性マネージャーと楽屋を出る寸前だった。今にも噛みつきそうな怒り顔で、入ってきたふたりを睨みつける。

「先ほどは申し訳ありませんでした。わたしの情報不足で、ご迷惑をおかけしました。本当にもう何とお詫びしたらいいやら……お前も早く謝れ！」と、渡部が立花をせつつく。

「申し訳ありませんでした。貴重な時間を無駄にしまして……」

無念な思いを抱きつつも、立花は一縷の望みに賭けた。北村が機嫌を直してくれば放映はあるかもしれない――が、それは叶うことのない望みだった。

「本当に無駄だったよ。あんなにも不器用なマジシャンがいたとは驚きだった。基礎が何もできてないじゃないか。いや、マジシャンとはいえないな。あれでマジシャンと名乗られたんじゃ他のマジシャンに失礼だ。お前はマジックが好きな、ただの目立ちたがりだな。よくもまあ、あんなんで恥ずかしげもなく、テレビに出ようなんて考えてものだな。頭が悪いんじゃないのか」

北村の語気は荒く、悪意に満ちている。なぶる喜びが潜んでいる。

立花は右の眉がピクリと動くのを感じた。

我慢だ。無になれ――

北村の罵倒は続く。

「考えが甘いんだよ。確かに仕掛けの技は凄かった。それは認める。だがな、単に仕掛けが凄いただけじゃないか。クローズアップ・マジックは技の切れ味が命なんだ。あんな派手な演出はいらないんだよ。たいしたテクニックもないくせして、仕掛けばかりに頼ろうとしやがって、反吐が出る」

何も考えるな。やつらに悟られてしまう。

「俺にもマジシャンの知り合いは大勢いるんだ。協会のお偉いさんとも親しい。俺がひと声かければ、もうお前なんて何処も使ってはくれんぞ」

北村は本気のように言った。華々しく彩られるはずだった立花の将来は断たれた――

抑えても抑えても、立花の中で北村への憎悪が沸き立つ。

「渡部君にも失望したよ。仕掛けに頼るだけのこんなやつに簡単に騙されて……」

わざと大きな音を立ててドアを閉め、北村は楽屋を出て行った。慌ててマネージャーが追いかける。渡部は北村が出て行ったドアを呆然と見ていた。ゆっくりと立花に向き直り、力のない笑みを見せる。立花に文句の一つも言う気力も失せたようだ。

「渡部さん、すみません。こんなことになってしまって……」

立花は心苦しくて仕方なかった。自分の所為で番組を台無しにしてしまい、制作費が泡と消え、渡部の信用にも傷をつけてしまった。

「ああ、いいんだ、気にするな。そんなことより、訊きたいことがある」

「何でしょう？」

渡部の目が陰鬱にギロリと光った。

「トランプが宙を舞い踊ったな。あれはどんなタネが仕掛けてあったんだ？」

「タネですか？」

タネは何もない。あったとしても、マジシャンが他人においそれと言うはずがない。そんなのは常識だ。どうしてそんなことを訊くのだろうと立花は訝った。

「あれはテレビ映えするからな。他のマジシャンにやってもらうんだよ。なあ、どうやったんだ？ どんなタネが仕掛けてあったんだ？ 教える。教えてくれたらドラマのエキストラとかで使ってやるぞ。テレビに出たいんだろ？ お前はマジシャンとしてやっていくのはもう無理だ。だったらマジックを考える側に回ればいいじゃないか」

渡部の言うとおりで思った。マジシャンとして大成するのは無理だろう。他の道を探すしかなさそうだ。だからといってマジックを考える側に回ることもできないし、ましてや俳優になんてなれるはずがない。そもそも――教えるタネがない。

「タネは……教えられません」

渡部が大仰に肩を落としてみせる。

「教えられない？ どうして？」

「どうしても……です」

「救いの手を差し伸べているのが分からないのか。俺だって責任を感じているんだよ。あんな分からず屋をゲストに呼んでしまったからな。大のマジック好きと聞いていたから呼んだんだが、後悔してるよ。あんなにも傲慢なエゴイストだとは思いつけなかつた。噂以上だよ」

「そのことも謝ります。僕だけじゃなく、北村さんが局の上層部を通して渡部さんに圧力をかけることはありませんか？」

渡部が、ふんと鼻で笑う。

「あるかもな。だが、北村さんの事務所の若手を何人か使ってやれば話は済む。それよりも……なあ、教えてくれよ。どうやったんだ？ お前だってあれがテレビで流れるのを見てみたいだろ？」

渡部の口調が命令から懇願に変わった。

立花とて、見てみたいのはやまやまだった。しかし――

「タネを教えるわけにはいかないんです」

「そんなこと言わないで、頼むよ。お前も観覧客の反応を覚えてるだろ？ まるで魔法を見ているみたいにとりとしていた。あれがテレビで流れればインパクトは絶大だ。世間をアッとさせられるだろう。お前が考えたマジックで町の話は持ちきりになるんだぞ。だから、なっ」と、渡部がなおも執拗に哀願する。

立花は困り果てた。目をかけてくれ、責任を感じてくれた渡部に報いたい。しかし、どう説明すればいいのか分からない。仕方なく真実を告げることにした、信じてはくれないだろうが。

「タネなんてないんです」

「タネがない？ どういうことだ？」

「だから……言葉のそのままの意味でして、タネなんて一切ないんです」

眉間に深い皺が刻まれ、渡部の顔がみるみる険しくなる。

「教えたくない気持ちは分かる。だが、言うに事欠いてタネはないだと？ 俺を愚弄するのもいい加減にしろ。それじゃなにか、あれは超能力でしたとでも言うのか？」

「そういうわけじゃ……」

「もういい。出て行け！ 目障りだ、消え失せろ！ 俺の前に二度と姿を現すな！」

立花は頭を下げ、渡部を残して楽屋を出た。スタジオに戻るべきかと考えた。みんなに謝らねば、と思う。司会の阿部、出演者の佐久間剛と星空夕樹、観覧客、そしてスタッフ。自分の至らなさの所為で大勢に迷惑をかけ、不快な思いをさせてしまった。謝罪のために立花の足はスタジオに向かいかけた。しかし、通路の途中でその向きをテレビ局の玄関へと変えた。どの面を下げてみんなの前に出ればいいのか分からなかったし、渡部が戻ってくるのが怖かった。

ふらりと映画館に入り、時間を潰してスーパーの閉店時間を待つ。こんなときは藤田と中川の三人で飲むに限る、と思った。あいつらなら嫌な顔をしないで愚痴を聞いてくれる。

つまらない映画が立花を苛つかせた。それは味わったばかりの苦い記憶を呼び起こし、北村への憎悪を再燃させた。北村の鬼のような顔がスクリーンに重なる。憎々しげな顔。北村があんなことさえ言い出さなかったなら、すべては上手くいっていたはずなのに。北村が何もかもを水泡に帰した。掴みかけていた栄光は手の届かないところへ行ってしまった。もはやその欠片さえ見えない。横暴だ。あまりにも理不尽だ。そんなことが赦されるのか。何の権利があって、俺から人生の喜びを奪うんだ。そっちがその気ならこっちだって――。

立花は心中で沸き立つ殺意を意識した。

その夜の酒は不味かった。いや、不味くさせてしまった。

立花のテレビ出演を愉しみにしていた藤田と中川は、放映中止を残念がり、立花の愚痴に耳を傾けてくれた。有り難かった。甘えている自分を情けなく思ったが、飲んでいる最中にも何度も北村の顔が頭をよぎり、立花は口をついて出てくる愚痴をどうにも止められなかった。

アパートの前の小道をふらふらの足で歩き、階段を踏み外しそうになりながら二階へと上る。帰り着いたのは真夜中の午前零時過ぎだった。

立花はトランプをテーブルに放り投げた。

「役立たず」と吐き捨て、ベッドに潜り込んで泥のように眠った。

しばらくすると目が覚め、例の感覚があった。どうやらまた出てくるようだ。

「役立たずとはあんまりだな」

スペードのキングが宙から降り、髭が触れそうなくらいに顔を近づけて言う。

「だってそうじゃないか。肝心なときに何もしてくれなかったじゃないか」

「無茶を言うな。儂らの力は他のトランプまでは及ばない。それくらい分かりそうなものだがな」

「分からないよ。僕は頭が悪いからな」

「ふふふ」

「何が可笑しい？」

「思い出したんだよ。散々な言われようだったな。あそこまで罵倒される人間を久々に見たよ」

「ふん。笑うがいい。だがな、その所為で僕はマジックを続けられなくなったんだ。どうしてくれる？ 幸福が遠のいたぞ。いいのか？」

「将来の幸福は遠のいたかもしれないが、目先の喜びは得られたはずだ」

「目先の喜び？ 何の話だ？」

「北村だよ。早速、殺してやった。望んでただろ？」

「まあな」

望んでいた。やつらに自分の意思が伝わるよう、わざと憎しみを増大させた。

「マジックを続けられなくなったお詫びの印に、これまでになく残忍なやり方で殺した」

「どんな？」

「それは、今は言わない方がいいだろう。いつもの刑事が話を訊きに来て、うっかり漏らしたらますます怪しまれてしまうからな。これでもいろいろ考えてるんだ。これ以上疑われてお前が逮捕でもされたら面倒だ」

「新たな血の提供者が必要になるということか？」

「そういうことだ。お前の血は悪くない。だから、できるならこのままの方がいい」

「そう言ってくれて嬉しいよ。僕たちはいいパートナーになれそうさ。そこで教えて欲しいんだが、僕はこの先、何をしたらいいんだ？ 何を目指せば幸せになれるんだ？」

「知るか。自分で考えろ。今日は大仕事をしたからみんな早く血が欲しいんだ。悪いが、いつもよりも多くもらうからな」

暗闇にいくつもの陰が立っている。物欲しそうに立花を見ている。

「分かったよ。さっさと済ませてくれ」

立花は腕を差し出した。チクリとした痛みが走る。

「ということは、新たな血の提供者が見つければ僕は用済みなのか？」

黄金の杯を抱えるキングに、立花は訊いた。

「安心しろ。新たな血の提供者を探すつもりはない。お前が裏切らなければの話だがな。滝田は裏切った。だからお前を呼び寄せた」

滝田のマンションへの引き寄せられるような感覚はそういうことだったのか。そして、そうするのが当然のごとく、キッチンでランプを手にしていて。

「すべてはあんたらの思惑どおりに動いているわけか」

「そういうことだ。だから儂らは存在し続けている。おっと、つまらないことを考えるんじゃないぞ。裏切ったら殺すといっただろ。考えるだけなら赦してやるが、実行に移したら即、死が待っているからな」

何もかもが見透かされている。不意をついてやつらを葬ることはできなそうだ。

「もう一つ教えてくれ。いつも夢の中にしか出てこないが、昼間は出てこられないのか？」

「夢の中が潜在意識を探りやすいだけのことだ。またくだらないことを考えたな。言うておくが、昼間に儂らを何とかしようとしても無駄だからな」

「僕は一生、あんたらの血の奴隷ということだな」

「パートナーにしてやってもいいぞ。ただし、対等な立場ではないがな。喋りすぎた、今日はもう終わりにする。ああ、そうだ。少しでもお前が疑われないようにしておいたからな。くれぐれも刑事に余計なことは言うなよ」

「気をつける……」

意識が遠のき、立花はいつ十二体の絵札が消えたのか分からなかった。

頭が割れるように痛い。完全な二日酔いだった。

何時だろう、とベッドの横の目覚まし時計を手にする。

昼前の十一時半。今日は何も予定がない。だからといって、ちょっと寝過ぎたようだ。

コーヒーを飲む。腹は減っていたが、まだ何も食べる気がしなかった。テレビをつけると、ワイドショーをやっていた。ヘリからの空撮で、何処かの高層ビルが大写しになっている。ホテルのようだ。報道陣が大勢詰めかけている。画面の上の方にテロップが書かれていた。

“北村謙太郎 殺害される”

このホテルに北村は泊まっていたらしい。北村が泊まるにふさわしい高級ホテルで、むろん立花は泊まったことがない。目玉が飛び出しそうなくらいに高いと思えて、ラウンジでコーヒーの一杯も飲んだことはない。ただの通行人として前を通り過ぎたことはあるが。

「事件の詳細はまだ不明ですが、北村さんはこのホテルに投宿されたあと、何者かによって殺害された模様です。情報が錯綜していてハッキリしたことは言えませんが、犯人は複数ではないか、との見方が有力となっています」

リポーターが悲愴の顔で叫び続けている。有名芸能人の凄惨な事件に右往左往するマスコミと対比して、警察が整然と辺りを規制している。

二日酔いの所為で頭の思考力を奪われた立花は、切りかわる画面をボンヤリと眺めていた。画面には騒々しい世界が映されているが、自分とは関係のない遠い場所での出来事のように思えた。それこそシナリオにそって演じられているテレビドラマのような気がする。

画面に在りし日の北村の姿が映った。若かった頃から最近までの出演作がダイジェストで流れる。その風貌から強面役の多かった北村の様々な顔が映し出される。笑った顔、悲しむ顔、泣いている顔、そして睨みきかせて怒っている顔――。それは夕べの北村の怒った顔へと繋がった。

。

途端に、立花は心が騒ぎ出し、狼狽した。もはや北村への憎しみはなく、事のあまりの重大さに愕然となった。この事件は芸能史に残る大事件となるだろう。観ている映像は後々まで使われるに違いない。警察は今まで以上に、犯人捜しに躍起になり、その矛先を昨日揉め事を起こした、最も動機のある自分に向けてくるはずだ。やったのはやつらだが、それを証明する手立てはない。となると警察はメンツに懸けて、状況的に一番疑わしい誰かを逮捕せざるを得なくなるかもしれない。テーブルの上のランプを見やる。

「何てことをしてくれたんだ……」

返事はない。

あったとしてもやつらの言い分は分かっていた。

“お前が望んだことではないか”

そのとおりだ。言い返す言葉はない。

何てことを意識したんだ、自責するしかない。

立花は自分が恐ろしくなった。北村の死を望んだ自分を嫌悪した。

「たった今、新しい情報が入りました」と、画面のリポーターが急ぎ込んで言う。手に渡されたばかりのメモを持っていた。

「北村さんのマネージャーの話によりますと、携帯に電話しても起きてこない北村さんを不審に思ったマネージャーが部屋に入ったところ、北村さんは酷たらしくバラバラにされて殺されていたそうです。そして、床は血の海で、壁や天井、至る所にわざとつけたとしか思えない複数の血の手形、足形があったということです」

警察の目を晦ますためにやつらがやったことなのは容易に察しがついた。

手形、足形を天井にまでつけるとなると、かなり大掛かりな装置なり、道具が必要となる。が、そんなものを運んでいたらホテル内で目立たないはずがない。それなのに目撃者が現れるはずはなく、警察は立花どころか、誰も容疑者にできないだろう。これまでの事件では立花を犯人に仕立て上げることもできたかもしれないが、今回の事件では無理だ。功を焦った警察は証拠品をでっち上げ、無理矢理にでも逮捕するだろうか。それならそれでも構わない、と立花は思った。やつらに魅入られているからには、いずれ死は免れないだろう。だとしたら逮捕される方がましかもしれない。やつらから離れられる、と思った。裏切ったわけではないからやつらも殺しに来はしないだろう。それがいい。逮捕されて刑務所に入れば、生き延びられる可能性はある。いや、果たしてそうだろうか。秘密保持のために殺しに来るかもしれない、それがやつらの流儀だとしたら。

それよりなにより、誰かがやつらの新しい所有者となると、また誰かが殺される。人の死を何とも思わないやつの手に移りでもしたら、それこそ大変なことになってしまう。

立花は悩んだ。死にたくはなかったし、何処かで死の連鎖を断ち切らなければならないと思うが、自分で実行に移したらすぐに殺されてしまう。どうすればいいのか。誰かの力を借りてやつらを処分するしかなさそうだが、いったい誰に――。藤田と中川の顔が浮かんだ。立花は首を振った。ひとりで上手くやる方策はないだろうか。はさみで切り刻もうとしても、こっちが先に切り刻まれるだろう。燃やすのはどうだろうと思った。だが、ライターを持っていない。ガスコンロで火をつければいいと思いついたとき、滝田の部屋のキッチンが思い出された。まるでトランプを燃やして処分するかのよう、大きなガラスの皿が置いてあった。滝田もトランプを燃やそうと考えたのだろう。しかし、ガスコンロのつまみに手をかけた瞬間に、やつらは容赦しなかった。滝田の血を飲み干してしまった。おそらく自分も同じ目に遭わされるだろう。

他に方法は、何か上手いやり方はないだろうか。金庫に入れて海の底に沈める――駄目だ。金庫に入れようとした瞬間に殺されてしまう。穴に埋めようとしても結果は同じだろう。他にないだろうか――。

考えを巡らせるが、何も思い浮かばないまま時間だけが過ぎる。いつの間にか陽は傾きつつあった。カーテンの隙間から西日が差し込んでいる。

玄関のドアがロックされた。ふたりの刑事が立っている。考え疲れていた立花は、刑事の尋問が億劫だった。しかし開けないわけにはいかない。

「また事件が起きましたね」

ドアを開けると、嫌みを込めた口調で坂上刑事が言った。

「何のことですか？」と、立花は空惚けた。余計なことを言わないよう気をつける。

坂上刑事がじろじろと立花を見た。上から下へと移した視線を顔に戻し、訝しそうにしている。

「会う度に痩せているような気がします。病気にでも？」

「そんなことはありませんよ」

病気と言えないこともない。たちの悪いウィルスに冒されている。

「顔色もよくない。一度、病院へ行った方がいいんじゃないですか？」

自分でも承知していた。体重が減ったのは事実だし、日ごとにやつれ、十歳は老けた気がする。

「お気遣いありがとうございます。二日酔いの所為ですよ」

坂上刑事は腑に落ちないようだったが、いつまでも他の話をしてはられないとばかりに、小さく頷いて真顔になった。

「それはそうと……ニュースを観てないんですか？ 北村謙太郎さんが殺されたんですよ」

「そうですか。知りませんでした。それが何か？」

「それが何かですって？ ずいぶんと冷めているんですね。昨日、北村さんとお会いになったでしょ。まるで北村さんとまるっきり面識がないかのような口ぶりでしたね」

「確かにお目にかかりましたよ。テレビの収録でした。北村さんや他の皆さんの前でマジックを披露したんです」

「そうらしいですね。そしてマジックが上手くいかなかったあなたは、北村さんに相当罵倒されたとか。本当のことですか？」

罵倒されて殺害に至ったと考えているのだろう。思っていたとおりの展開になってきた。

「ええ。僕が悪いんです。僕が下手くそだったから北村さんを怒らせてしまったんです。散々に言われてしまいましたよ」

自虐の笑みを浮かべる立花に、刑事は何の反応も示さなかった。

「それでは立花さん、夕べのアリバイを訊きましょうか。九時から十一時頃は何処で何をしていましたか？」と、事務的に話を進める。

九時から十一時が犯行時間なのだろう。

「その時間はバイト仲間の藤田と中川と飲んでいました。〈火の国〉という郷土料理の居酒屋です。何度も行ったことがありますから、店員さんも顔を覚えてくれていると思いますよ」

「それは確かですか？」と、少しばかり眉根を寄せた坂上刑事が念を押す。予期していなかった答えのようだ。声に悔しさが滲んでいる。

「もちろんですよ。どうやらアリバイは成立したようですね」

「まだですよ。ウラを取らないと」

強がりを見せるものの、その意気消沈ぶりは手に取るように分かった。

またぞろ、刑事を揶揄したい気が湧き起こる。

「仮に今言ったアリバイが嘘だったとしましょう、皆がぐるになって僕のアリバイ証明に荷担してくれたとしてもですよ、どうやったら天井に手形やら足形をつけられるんですか？ 手形はまだしも、足形をつけるなんて人間業じゃない。トランポリンでもない限り無理ですよ。いや、トランポリンでも無理かな。そんなに上手く身体を……」

坂上刑事の目が獲物をロックオンした蛇のようにきらりと光り、立花は言葉を止めた。

「やっぱり知ってたじゃないですか」

「えっ？」

「北村さん殺された状況を、ですよ。さっきは知らないと言ってたのに」

そうだった。余計なことを言わないように、何も知らないふりをしていたんだった。

「そうだったかな……。テレビですよ。ちょっとだけテレビを観たんです。壁や天井に手形と足形がついていたって言ってましたから、知ってるだけです」

「テレビを観る前から現場がどうなっているのか、知ってたんでしょ？」

「いいえ、そんなことは……。知るわけじゃないじゃないですか」

答えがしどろもどろになる。キングが詳細を話してはくれなかったので実際に知らなかったのだが、知っていたと言ってるのも同然だった。

「いや、知っているはずだ。あなたが直接手を下したとまでは言いませんよ。しかし、あなたの周りで次々と事件が起こっているんだ、あなたが何も知らないはずがない。それとも偶然だとでも言うんですか？ 一連の事件は単なる偶然だと」

立花は答えに窮した。偶然だと言って突っぱねることもできた。が、それでは刑事を納得させられるはずがないし、この期に及んで卑怯な気がした。

逮捕されたいとの思いが頭をよぎる。逮捕されてやつらから離れたい。やつらから解放されたい。そうなるとやつらは次の誰かの手に渡るだろう。それでいいのだろうか。いいはずがない。誰かがまた殺される。

それに――知っていることのすべてを話したところで、信じてくれるとはとても思えなかった。自分でも未だに悪夢の中いる気がしている。ただの悪夢だったらどんなにいいだろう。しかし現実だ。現実には何人も人間が死んでいる。信じてもらえそうにない話を信じてもらうにはどうすればいいだろう。人はその目で見たものしか信じないものだ。白昼にやつらが現れるかどうかは分からないが――

目の前に屈強な刑事がふたりいる。

自分ひとりでやつらに立ち向かうのは無理だろうが、訓練を積んだ彼らがいればあるいは――立花は決意した。

「ええ、知っています。僕の周りで起こった事件のすべてを知っています」

坂上刑事が意表を突かれたように目を大きく見開いたあと、微笑みを浮かべた。

「やっと自供する気になったようですね」

「これ以上、誰かが死ぬのを見たくないですから」

「いい心がけです。では署の方で話を聞きましょうか」

「その前に……」と、立花は奥の部屋へ行き、テーブルの上にあった木製の箱を持ってキッチンに立った。中にはトランプが入っている。急いでそれをガスコンロの横に置いた。

「滝田さんから譲り受けたものですね。そんなものをどうするんです？」

ふたりの刑事は興味深そうに身を乗り出し、トランプに目をやった。

立花は玄関のドアが開いているのを確認した。いざとなったとき、刑事だけでも逃げられるようにしておかなければならない。

「箱ごと撃ってください」

「うつ？」

うつって何だと、ふたりの刑事が顔を見合わせる。

「銃ですよ。拳銃で撃ってください」

坂上刑事が、ふっと笑みを漏らした。

「ドラマだと格好良く銃を取り出すんですけど、普段は持ち歩かないんですよ」

自分では実行しないで刑事にその任を託そうと考えていただけに、立花は落胆した。しかしいつまでも落胆してはいられない。いつやつらが姿を現すやらしれたものではない。

「それじゃ燃やして」

そこのコンロで火をつけて、と目配せする。

なおも戸惑いを見せ、どうしたものかと顔を見合わせるふたりに、立花は苛つかされた。

「時間がないんだ！ 早く！」

不審の面持ちながらも、やっと坂上刑事が箱を掴もうと手を伸ばした、そのとき――

「キャー！ 助けて！」と、女性の悲鳴が聞こえた。

近い。すぐそばだ。

ふたりの刑事は声のした方へ駆け出した。隣の部屋のドアをドンドンと叩く。

「どうかしましたか？ 大丈夫ですか？」と、大声で呼びかける。

立花は血の気が引いた。やつらだ！

「隣には」

誰も住んでいないと玄関のドアから顔を出して言いかけたが、その寸前にドアは鼻をかすめてバタンと閉まった。反射的に顔を引っ込めなかったなら、顔面を強打していたところだった。

ドアは開けられないと踏んだ立花は、トランプの箱を引っ掴むと部屋の奥へ行き、窓を開けて放り投げた。木の箱は放物線を描き、アパートの裏の路地を越えて飛んでいった。

「おい、開ける！ 開けないか！」と、玄関の向こうで刑事の怒声が響いている。

トランプを投げ捨てたことでひと安心を覚えた立花は、おもむろに玄関へ向かった。

「今開けますよ」と言い、玄関のドアに目をやると、不気味な黒い陰があった。陰は人の姿になり、その正体を現した。

「残念だよ」と、スペードのキングが憎々しげに言う。怒りに満ちた形相で、今にも斬りかかりそうに剣を構えている。

立花は後退り、振り返った。窓から逃げようと考えた。しかし、奥の部屋は絵札たちでいっぱいだった。威嚇したり嘲笑したりしている。退路を断たれ、立花はキングに向き直った。

「違うんだ……」

落ち着くとばかりに、両の手のひらを胸の前で広げる。

「何が違う？ 裏切ったではないか。儂らを投げ捨てた」

「悪かったよ。本気じゃなかったんだ。怖くなってつい……」

「今さら何を言っても無駄だ」

「無駄か。どのみち僕は殺されてたんだな？」

「それは違う。殺すつもりはなかった。まあ、いずれ瘦せさらばえて死んでいただろうがな。が、それは儂らのあずかり知るところではない。お前の生命力の問題だ」

「幸福を与えるというのは嘘だったんだな」

「嘘ではない。現にお前は掴みかけたではないか」

「幸せを掴もうが掴むまいが、生きようが死のうがあんたらにはどうでもいいことだったんだ。甘言で僕を騙して逃げないようにしていただけなんだ、そうなんだろ？」

「言っただろ、生きるか死ぬか、それはお前の生命力次第だ。儂らの知ったことではない」

「僕がどうなろうと知ったことではない——それがあんたらの流儀だよな。寄生虫は宿主が死ぬと自身も滅びてしまうが、あんたらは違う。あんたらは新しい宿主の元へ移れる。次々に宿主を変えることのできる寄生虫というわけだ。自由に動いて人の生き血を吸うなんて、まるでノミかダニだな。いや、やつらの方がまだましだ。やつらは吸い尽くすほどの強欲じゃない。あんたらに比べたら控えめだよ。分をわきまえている。己の強悪に謙虚だよ」

助かる術を見出せない立花は、恐怖を紛らわせるために、侮蔑の言葉を浴びせ続けた。その間は生きていられると思った。だが、いつまでも続くわけがない。言葉はいずれ途切れる。

「何とでも言え。とにかくお前は裏切った。どうなるか、分かってるな」

スペードのキングが前へ一歩踏み出す。剣先を立花の喉元に向け、不敵な笑みを浮かべる。

立花は振り返った。すると、ふたりのジャックがそろりそろりと近づいてきていた。口を塞いで羽交い締めにする気だ――。

「やめろ……」

大声で叫んだつもりだったが、それは弱々しいものでしかなかった。立花は背中に痛みを感じ、そして胸から突き出ている剣先を虚ろな目を見た。

玄関のドアが激しく打ち鳴らされた。ドアノブがガチャガチャとうるさい音を立てる。

「何をしてる！ 開けろ！」

刑事の音がする。

「開けないか！ さては逃げる気だな」

ジャックに引きずられる立花の耳に刑事の声は、薄れ行く意識とともに遠ざかった。

「おい、アパートの裏へ回れ！」

坂上刑事が若い池谷刑事に命じた。池谷刑事が階段を駆け降りていく。

「出てこないならドアを蹴破るぞ！」

強権的に言ったものの、ドアが開く様子はない。

頭に血が上った坂上刑事はドアを蹴った。が、ドアはびくともしない。裏側の窓から入るより他に方法はなさそうだ。しかしこの場を離れたらその隙に逃げられるかもしれない。無駄を承知で刑事はもう一度ドアノブに手をかけた。すると、ドアは簡単に開いた。

「何だ、開いてたんじゃないか」と独りごちる。

中に入った瞬間に、血の臭いが坂上刑事の鼻をついた。キッチンから奥の部屋へと二本の長い血の痕があった。そして何かを拭き取ったかのように、血の痕にいくつもの筋ができていた。さながら大きな獣、虎とかライオンが舐めたようにも見える。どうしたことだろうと首を捻る。が、考えている暇はない。先を急いだ。血痕を見れば立花がどうなったのか、容易に想像がついた。

坂上刑事は土足のまま、血の痕を踏まないようにして奥の部屋へ向かった。

そこには無残な光景があった。予想はしていたものの、これほどとは思わなかった。立花の身体は鋭利な刃物でバラバラにされていた。こっちの床にも血痕があり、同じく獣が舐めたような筋ができていた。複数の血の足跡もあった。慌てて走り回ったように見える。床の血痕の量はそれほど多くはなかった。身体中から流れ出たにしては少ない。坂上刑事は滝田の事件を思い出した。あれも身体に血がほとんど残っていなかった。同じ犯人に違いない。これほどおぞましい犯行をいとも簡単に、素早くやってのける犯人とはいったいどんなやつだろう。どう考えても人間の仕業とは思えない。坂上刑事は怖気を覚えた。

窓を確かめる。開いていた。犯人はここから逃走する以外にない。窓の外を見やると池谷刑事が暢気そうに見上げていた。

「立花を捕まえたんですか？」と訊く。

「ということは、犯人を見ていないようだ。」

「いや。やつは死んでる」

「えっ、死んでる？」

「ああ。誰も見なかったか？」

「分かってはいたが、念のために訊いた。」

「いえ、誰も。死んでるって、殺されたんですか？」

「そうだ。ひどい有様だよ」

「僕が駆けつける前に逃走したんでしょうか？　しかし、そんなことが……」

池上刑事が信じられないと怪訝な顔をする。

「とにかく応援を要請してこっちに来い」

坂上刑事は首を捻った。

ドアを開けるまでほんの数分しかかからなかった。二分か三分か、そんなものだ。池谷刑事は裏へ回るのに一分もかからなかったはずだ。そんな短時間に、犯人はあれだけ残虐なことを行い、逃げおおせたというのか。考えられない。犯人はまだこの部屋の中に隠れているかもしれないと思い、坂上刑事は戻ってきた池上刑事とともに部屋中をくまなく捜した。押し入れ、風呂場、トイレなど、捜せるところはすべて捜した。が、結局、何処にも見つからなかった。

犯人は忽然と消えた。どういうことだろう。

血を舐めたような痕からすると、獣の仕業かもしれない。だが、明らかに凶器は鋭利な刃物だった。刃物を使う獣？ わけが分からない。何より、獣であれ何であれ、忽然と消えることなどあり得ない。

すぐにも応援がやってくるだろう。この場で起こった事象をどう説明すればいいのか、坂上刑事は思案に暮れた。

隣のアパートが騒々しい。

二階の子供部屋でひとり留守番をしていた智紀は、携帯ゲーム機の画面に目をやりつつも、気になって仕方がなかった。その所為で最後のマリオが死んでしまい、ちっ、と舌打ちする。何事だろう。カーテンを開け、窓から外を見ると、隣のアパートは野次馬でごった返していた。パトカーの回転灯も見える。智紀の好奇心の血が騒いだ。階段を降り、玄関の扉を急いで開けて外へ飛び出す。小さな庭先を駆け、門扉を開くと、一番近くにいたおじさんに話しかけた。

「何があったの？」

「人殺しだってよ。怖い世の中だねえ」

「こんなところで……」

目と鼻の先で殺人事件が起きるなんて――。智紀は来たことを少しだけ後悔した。おじさんに言われなくとも恐ろしかった。

「犯人は捕まってないんだってよ。危ないから子供は家に入ってな」

智紀はますます怖くなった。おしっこをちびりそうだ。もっと見ていたい気もしたが、素直におじさんの忠告を受け入れ、智紀は門扉を閉じた。玄関の前で立ち止まり、鍵を駆けた方がいいだろうかと考えた。しかし、かけないことにした。パパやママが帰ってくるのはもうすぐだし、あれだけ大勢の人が目の前にいるのだから、まさか犯人もここへは来ないだろう、と思った。

ふと玄関脇に何かがあるのが目に入った。木の箱。何だろう。智紀は拾い上げ、ふたを開けた。中にはトランプが入っていた。滴る血のような真っ赤な色をしている。誰かが捨てたようだ。

ママにあげたら喜ぶだろう、と思った。ママはトランプ占いに凝っている。あまり当たった試しはないが、これなら当たりそうだ。それより僕がもらおうかな。トランプゲームは弱い。だけど、これなら勝てそうな気がする。

智紀は愛おしそうに、トランプを家の中へ持ち帰った。

了